
little

基

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

l i t t l e

【Nコード】

N 2 9 5 3 Q

【作者名】

基

【あらすじ】

『舞い上がれ、もっと、もっと広い空に。』

高崎まゆ。 大学三年生。 21歳。

背が低くてショートカットで見かけも成績もごくごく普通。ただどオーボエが、音楽が大好き。

音楽があるからどんなことでもがんばれる。

そんな女の子の、ちいさな飛躍の物語。

皇帝

私の周りの女の子たちは皆、彼を見ると背骨がなくなってふにやふにやになってしまふ、と言う。

あの低い声に名前を呼ばれたい、あの鋭い目に熱く見つめられたい、あの大きくてバランスのいいセクシーな体に抱かれたい、うんぬんうんぬん、留まることを知らぬ「彼」談義。

かつこいいいよね。

ありえないよね。

なんであんな人が存在するのか信じられない！

今日も授業そっちのけで空気にハートマークを飛ばしている女の子達に、私はなんだかげっそりしながらオーボエをクロスでみがいた。リードの水分がちよっと足りない。だけどオケの授業はあと1時間、調整する時間はない。

（あー、やだなあ、次、あのドヴォルザークの協奏曲なのに……。）

他でもない噂の「彼」がソリストを務める、チェロの名曲中の名曲。なんでかわからないけどオーボエも曲中で多用されてて、首席奏者である私が否応なしにソロを張らされる嫌な曲。

泣ける。

泣けてくる。

今日もまた「彼」の怒声にぶつとばされるのかと思うと……。

（ちゃんと練習、してるのに。なんで気に入ってもらえないんだろ

う？)

「あ、ねっ、きたよーっ。瀬川君！今日もセクシー、シャツにジーンズv v」

「ちよつと遅かったね？実行委員の仕事かな」

「あ、伊勢君も来たわ！相変わらず仲良しな二人組み。うーん、眼の保養」

「今日はなんか機嫌よさそうだね」

「……………」

きゃいきゃい言ってる皆から一線置いて、わたしはただ黙って楽譜をめくってた。いつもこう。わたしは流行の女の子たちにはついていけない。一緒にいると自分が地味でかわいくないダメな女の子に思えてくるから。実際そうなのかもしれないけど。

ちっちゃくてショートヘアで大人しいけど、

わたしにはわたしなりのポリシーがあるんだもん。

「カイ、来たね。では早速ドヴォルザークをはじめてもいいかな？」

舞台袖から小熊を連想させる初老の男性がとことと出てきて場をなごませた。カワイイけどこの方は世界的に有名な指揮者さまだ。ドイツ語で何言ってるかまったくわかんないけど、そのあたりは「彼」、瀬川界君がいるから問題なし。

「はい。ただ今日は——2楽章からやっていただいてもよろしいですか？気になる部分が多くあつて」

ネイティブであるウィルソン教授とほとんど変わらぬドイツ語で瀬川君は喋る。語学が大得意だそうで、5ヶ国語は軽いそうだ。す

ごい。そもそも世界的音楽家に呼び捨てにされること自体すごい。
理解不能。

（っていうか、なんで2楽章なの……。）

泣きそうになりながらオーボエを構えた。楽譜を確認するとある
わあるわ、ソロの場面がめじろおし。これはイジメとしか思えない。

「はい、じゃあ始めましょう。今日は2楽章からネ。カイの希望だ
から」

にこにこウィルソンは言い、それからふと真顔になってタクトを
構えた。

瀬川君は余裕しゃくしゃく、と言った表情で優雅にチエロを準備
している。

その姿、黒い髪、整った顔立ち、ちやらちやらへらへらしたここ
が全くない空気、確かにすごく素敵だけでも。

わたしはあんまり、好きじゃない。

っていうか、怖いんだ。

（ニガテ、なんだよねえ……）

そう。

学内の王者である瀬川君は、わたしにとって今一番怖い人物だったりした。

皇帝と、わたし

「オーボー！」

うわ、来た……。

彼の怒声にわたしはぴたりと手を止める。っていうか竦んだ。ウィルソンがおやおやという表情でタクトを下ろし、つづいてオケのメンバー全員が演奏をストップ。

もちろん、みんなの視線はただ一点、わたしの方に。

ほんと泣きたい。
はずかしい。

「弱い。聴こえない。毎回言ってるのになんで進歩がないんだ？」
「……すいません」

ステージの最前部、ウィルソンの脇から私のほうをにらみつけてくる彼に、ほとんど聞こえないくらいの声で返した。けどちゃんとその謝罪は届いてしまっていたようで、彼はますます苛立った様子露にする。

「謝ったつてしょうがない。行動で返せよ。演奏っていうのはそういうもんだ。」

「……………」

「目立つパート受け持ってたから、自覚持ったほうがいいぞ」

彼とはこういう人なのだ。

同い年だろうが年上だろうが年下だろうが、目上だろうが目下だろうが、とにかく率直、ストレート、で遠慮がない。自分の思ったことを場所はばからず口にするから、その人気の高さと同じくらい良く思われていないふしもあると聞く。

だけど、それでも皆が彼に反論しないのは、それはひとえに彼がほんとにすごい人だから。勤勉で、努力家で、誰に何を言っても納得させてしまう力を持っているから、これに尽きる。

「じゃ、再開。もう一度Hのところから」

オーボエを持つ手に汗がにじむ。よくない傾向だった。楽器が傷んでしまう。けれど、緊張すればするほど汗は増え、手がすべり、ミスが増える。

何回も何回も止められて、怒鳴られた。

「オーボエ！」

「耳あんのかよ!？」

「言わせてもらえばクラリネットもフルートもファゴットも!木管弱いぞ!」

「あああサードヴァイオリンうなりが足りない!コンミスちゃんと指示飛ばせよ!」

次第に注文が増え、私だけではなく他のパートも叱咤しはじめる彼。なんとも言えない目つきをメンバー達に送られて、わたしはひたすら縮こまるばかり。

これじゃまるで、わたしのせいで皆が怒られてるみたいだ……。

鼻の奥がつんとしたけど、唇を噛んで涙はこらえた。泣いたらダメ。負け。

そう思って、必死で一時間をやりすごした。

「おつかれー」

「おつかれさまでした、瀬川先輩今日もきびしかったねー」

「なんか、あんなに言われてもむかつかないのって、やっぱりあのひとだからだよな……あのテクニックみた？ すごい、なんであんな正確に音程とれんだろ」

「うん、ほんと、そこいらのプロなんかより全然うまいよねー……」

授業終了。

それが意味するものは地獄からの解放、同時に果てのない自己嫌悪タイムのスタート。

次の時間はこのホール空いてるはずだから練習していこうと思ってオーボエのリードをはずす。

「あれ、まゆ帰らないの？」

「……うん。もうちょっと練習してく。」

「ソロいっぱいあるもんねえ、でもまゆはただでさえ練習家だから、もうあんまりすぎないほうがいいと思うよ？」

「そういつわけにもいかないでしょ。あんなに、言われちゃったらす」

みじめな気分で笑顔を作った。友達の歌苗もまあね、とうなづいて、フルートをしまったバッグを肩にかけた。

「じゃあね。また明日」

「うん。バイバイ、かなえ」

「ばいばーい」

ぞろぞろとメンバーが撤退していつて、やがて私は一人になる。

やっと一心地ついた。

はー、とためいきをついて、取りあえず今日の反省をすべく楽譜をめくった。

とたん。

ことりことりことり、と、明らかに誰かが舞台袖から歩いてくる気配。

——やばっ。まだ誰が残ってるの？

一人で練習してるところなんて絶対に見られたくない！わたしは天才でも才能があるわけでもなんでもないから、そういうはずかしいところだけは絶対誰にも見られたくない、うわあやばいピンチ！！

あわあわあわ、と狼狽していたわたしに、やがて聞こえてきた、声は。

『……それにしても管楽器はひどいもんですよ。おわかりになるでしょう、ウィルソン？彼らは俺たち弦生徒が嫌いなあまり、わざとへたに演奏してる。やりにくくてしょうがありませんよ』

『やはりそうか。薄々気づいてはいたのだが、まさか面と向かって

聞けなくてね。残念なことだ。個々の能力としては、この学校は実にすばらしいレベルの高さを誇るのに」

わけのわからないドイツ語のイントネーション。

ひゃああああ、と尻尾をまいて逃げ出したくなる。

ウィルソン先生と――瀬川君だ。

『今日はこの上まだレッスンをするかね?』

『いいえ、俺はあまりレッスンをしすぎるのは好みません。……つて、あ?』

ひざのうえのオーボエをにぎりしめ、うつむいていた私の方に、

瀬川君が目を向けた。気がした。

気がしたっていうか、事実そうだ。流暢なドイツ語が最後のあたりいきなり日本語になった。

気詰まりな沈黙。

わたしにとっては死の沈黙。

「まだ残ってたのか? オーボエ」

残ってちゃ悪いですか。

オーボエって名前じゃありません。

っていうかその怖い眼に怖い声やめてください。顔があげられません。

「……練習しよう」と

「何? 聞こえない」

「練習しよう」と、思って。残ってました。だけど邪魔なようなら帰

ります」

聞き返されて、少し声を大きくする。ほとんど意地だった。瀬川君とわたしは同学年だけど、なぜか言葉は敬語になった。

目の前の譜面台に置かれていた楽譜をつかんで、立ち上がる。楽器ケースは管棟に置いてきてるから、これだけでいい。

「お邪魔しました」

「おい、オーボエ」

「オーボエじゃないですってば！」

『カイ、もう少し女性の扱い方を上手にきなさい。全く君は、これと決めたもの以外に対する情が薄すぎるね』

半泣きで出口へと駆け出した私を、引きとめた手があった。小熊のウィルソン先生。なにやら早口で瀬川君に言葉をかけ、その顔を真っ赤にさせた。

……真っ赤に。

え。

え？

ええ！

「……………からかって楽しいですか、俺を」

「何もそうは言っていない。ええと——オーボエの、名前はなんといったかな？」

「まゆです。マユ・タカサキ」

「かわいい名前だ。ではマユ、きみは帰る必要はない」

「——え？」

眼をむく私、やさしい眼をした世界の巨匠、その後ろに仏頂面で控える長身の青年。

なんだか妙な構図、だった。

「マユは先ほどの時間にカイに止められたことを気にして、練習しようとしていたのだろう？わたしたちがそれを止める権利はないよ。」

「でも、うい、ウィルソン先生と、瀬川君は」

「ちよつと打ち合わせしたかっただけ。別に練習しようと思ってたわけじゃない」

「――」

低い声。

瀬川君が声を挟んできてびつくりした。
恐る恐る視線を彼に移してみる。

すると、あるうことが眼があってしまった。

こ、怖っ！

「……………」

「……………何？」

「え、ええと、あの」

「お前って、いつもそうなのな。オケの時もさ。いいたいことあるなら言えばいいだろ。オーボエ吹くのに関しても、言いたい事を表現しなきゃ意味ないだろ」

「え？」

肩から力が抜けた。何の話をしてるんだろう？

「だからつまり俺がオケの時間におまえばかり怒鳴るのはだな」

うなづいた。

ウィルソンが満足そうに微笑んでいる。

ふと、思ったことは、瀬川君の眼は、ずっと思い込んでいたより全然優しくてきれいだったということ。こわくなんてなかった。

ただ、まっすぐなだけで。

「おまえ、もったいないよ」

ほんとうは、きっと誰よりも優しく何かを見つめることができる目なんじゃ、ないだろうか。

「もったいない……？」

「いい音してるし、テクニクもあるのにな。控えめすぎるんだよ。臆病で、縮こまってて。誰に対して遠慮してんだか。俺は、自分で言うのはなんだけど、かなり音が目立つんだよ。おまえみたいなタイプだと消されちゃうわけ。わかるだろう？」

「う、うん。自分でもそう、思う」

「もつと出していいから。遠慮する必要なんてどこにもないから。やりすぎてもやりすぎにならないよ。なんてったってウィルソン先生の指揮するオケなんだから。——そうですね？先生」

「カイの言うとおりだよ」

にこにこ、世界的巨匠はほえんだ。

ほんとかわいくて困る。抱きしめたくなくなってしまっ、ティディベアのようだ。

「まゆ。わたしはね、クラシック音楽とは自由に、好き勝手にやっていいものだと決して思わないよ。作曲家に対する誠実さを忘れてはいけない。演奏させていただくという気持ちを常に持ちつづけなければならない。わたしたちはただ演奏するだけなのだから。けれど、きちんと勉強してその気持ちを忘れなければ、後はわたしたちの世界だ。持てる技術と表現力の全てを使って、自由に演奏する。まゆはもう十二分に誠実で、勉強している。もっと自由にやってよいのだよ」

眼から鱗だった。

世界が崩れたみたい。

背中が、手が、軽くなったのがわかる。

そうなの？

わたし……自由に弾いていいの？

「頑張れ、高崎。」

瀬川君が言った。

思わず見上げた。

「こんなチャンス滅多にないよ。世界的巨匠と共演できるなんて。だから、頑張つて、楽しもう。」

笑つては、いない。

瀬川君の口元は笑つてはいなかった。

だけど、とてもやわらかい空気。

瞳にやどる、まるで子供のようなきらめき。

「じゃあ私達は帰るから。まゆ、がんばりなさい」

「え、あの、はい」

「また明日。」

「うん……また、明日。」

楽器をしまい、瀬川君はウィルソンと共に去っていった。
胸に残る余韻がふんわりと温かい。

あれ、と思った。

わたし、瀬川君のこと、さっきまであんなに怖がってたのに。
今は……そうでもないな。

むしろ。

（——意外といいひとなんだ）

ちょっと、嬉しかった、かも。

わたしの音

「まゆ、最近すごいうまくなった」

室内楽で組んでいる歌苗が、驚いたように言った。そうかな？と私は首をかしげる。たしかにちょっと弾き方は変わったかもしれないけど……周риには不評だ。自分ではいいと思っているけれど、特に担当の教授からの反応は最悪。

「そんな音じゃどこにいつても通用しない」

だって。正直かなりへこんでる。

どうやって弾けばいいのかわからない。

どんな音がいいのかわからない。

音を否定されるっていうことは、多分、わかんないけど文章でいっただけで文字を否定されるのと同じことだから、ほんとに寸止めされてる気分。弾いちゃいけないよって。

泣きたくなるよね。

じゃあ、わたしの音楽は？って思うんだ。

音だけで耳をふさがれてたら、わたしの表現したいものは、誰が聞いてくれるの？って。

「よくなった？ほんとーに、そう思う？」

「うん。あたしが思うには、だけど。音がくつきりして、言いたい事が明瞭になってきたみたいだよ。まゆは今までうまいのに、どっかオドオドしてて歌がちゃんと聞こえてなかったから」

「んー。そうなのかなあ。でも周りには不評。まいつてる」

「大学が合わないのかな。まゆって独特だからね」

独特だからね。
うれしくない。

どういう意味で言ってるんだろう。

いい意味なのか、悪い意味なのか。

個性という言い方をすれば都合よく捕らえられるけれど、
所詮わたしはまだ勉強中の身。なにがよくてなにがいいかなんて、
誰かに聞いてももらわなければわからない。

でも、教授や友達に聴いてもらってたって、別にうれしくもないし、
満足もしないのだ。

へたなのにもっと大きな場所を求めている。

最近、わたしは大学が息苦しい。

「高崎さんー」

「んー」

最終講義の時間、机につっぱしていた私の元に訪れたクラリネット奏者がひとり。中西くんだったかな。まじめで誠実な男の子。

オケでは近くの席だから、割とよく話す方だ。

「どーしたの」

「あのさ、聞いた？音楽祭である室内楽のステージでさ、高崎さん
オーボエ四重奏やることになったんだってよ」

「は？誰が？」

「だから、高崎さん。あなただよ、あ・な・た」

息を止めた。理解する。

「……………はあ————！！！？？？」

なんの話、なのお！？

「無理だよ」

「けどもう決定事項なんですよ」

「無理。できない。ただでさえ今スランプ」

「……………まゆう。可愛いそーだけど、やるしかないよって言うしかない」

ファミレスのお向かいの席で、歌苗が言う。メロンクリームソーダを飲んでいる。わたしはわたしで、うさつぱらしにハンバーググラタンを注文していた。

なぜか隣に中西くん、歌苗の隣には歌苗の彼氏のサックス科の瘦せた男の子。辻田くんとか言った。たしか。

「まゆは自分で思う以上に周りから注目されてんだよ。うまいんだから。成績はいまいちぱつとしないけど、あんたはうまいの！」

「逆ギレされながら言われてもわけわかんないからー」

「逆ギレもしますよ！瀬川くんにあんなにしごいてもらっちゃってさー、憎たらしいったらありやしない！」

「……………だったら歌苗しごかれてみれば？毎回オケの時間に周囲から

無言の憎悪を受けてるわたしの立場にもなつてよ！」

「ま、まあまあ。ふたりとも落ち着け！ほら、注文きたよ！」

辻田くんが割って入り、いつのまにやらテーブルの隣にたつていたウェイトレスが面倒くさそうな顔で届けたメニューを置いていった。ハンバーググラタン、チョコレートパフェ、エビフライ、オムハヤシ。みごとにばらばらで食い合わせが悪そう。

今の今まで音楽雑誌を読んでいた中西君が顔をあげ、やおらスプーンを片手にオムハヤシを食べ始める。

ぱくぱくと口を動かしながら、「っていつかさ」と喋り始めた。

「なんで瀬川君が出てくるわけ、そこで。歌苗さん」

「かつこいいから。あこがれだから。まゆがうらやましーから。それだけ」

「おまえ、彼氏が隣にいのにフツーそゆこと言うか？」

「いいすとも。瀬川君みたいな人はふたりといない！」

「……まあそりゃ認めるけどさ。彼は今カンケーないでしょ」

辻田君のつぶやきに心から賛同した。まっただだ。

「瀬川君なんてどーでもいいし。っていうか私は四重奏なんてできない。第一メンバーだれか知りもしないし」

「うお、大胆発言。高崎ちゃん瀬川君にキョーミないの？」

「ないよ。むしろ怖いし」

「っはー、悠長なこと言っちゃってさ。あんたその内やな目にあうよ」

今日はほんとに虫の居所が悪いらしい歌苗。わたしはわたしで余裕がないから、感情を押さえることもできずにムカツイていい返す。

「は？何それ、どういう意味歌苗」

「オケの女の子たちはみーんな、あんたを目の敵にしてるってこと。瀬川君にひいきされてるって理由で」

「意味わかんない、ひいきなんてされた覚えもないし。第一彼とほっとんど接点なんてないし」

「だから、それが白々しいつつつてんの！」

いきなり、歌苗はファミレスのBGMも途切れるくらいに大きくてヒステリックな叫び声をあげた。

叫ぶと同時にだん、と拳でテーブルを叩いたものだから、メロンクリームソーダがこぼれて私のハンバーググラタンのお皿に入る。

一瞬、他のお客も店員も私も中西くんも辻田君も、わけがわからずに歌苗を見つめた。

歌苗は頬を紅潮させて、もともと厚めの唇をさらに突き出して怒っていた。本当に怒っていた。わたしがあつけにとられるくらいに。

「かなえ？」

「帰る。あんた、ちょうムカツク」

「え？え？え？なに、なんなの？はつきり言つてよ、わたしが何した？」

「わかってないところがムカツク。四重奏、キャンセルでもなんでもすれば？何が起きても知らないけどね！」

「……意味がわからない」

ショック、だった。

歌苗はわたしが一番近い友達のはず、だった。

それなのにどうしていきなり怒るのだろう。本気で。本気でわたしが憎くてしょうがないような、あんな目つきで私を睨んだのだろう。

「ま、待てよ歌苗、おまえ何やってんの？」

「ついてこないで。ひとりで帰るし。浩平知らない」

「い……おい、待てよっ。歌苗っ!!」

スニーカーの足元でずんずんと歩いていく歌苗を、慌てて追いかける辻田くん。彼もまた怒っていた。歌苗に対して。歌苗を怒らせたのは私だった。私は、何に怒っていいのかわからなかった。

「……高崎さん、大丈夫？」

「……へこむ……」

中西くんが心配してくれて、ほんとキツかった。

辛いとき優しくされると号泣したくなる。

「とりあえず、食べない？食ったらまた元気でもかも」

「……あ、お勘定……」

「だいじょうぶ。俺払うよ。明日浩平にまとめて請求すっからさ。」

中西君は笑い、それから小さな声でこっ付け加えた。

もちろん、アイツが明日学校来てればの話だけど。

「もーやだあ」

落とした視線の先にはバッグと、今日学校からもらってきたばかりの四重奏の楽譜。

ほんとどうしていいかわからなかった。
テーブルに肘をついて髪をかきみだす。

最近、ほんといいことないよ……。

ふんだりけったり

歌苗に一方的にマジギレされてから一週間。

四重奏は……結局やることになった。学校側からのたつての希望で、というか、ウィルソンからの希望だったそうで、楽譜を見ながら演奏していいからという条件がついたので、私は最後の最後でうなづいた。

知り合いの子がメンバーの内のひとりにいたのも心強かったし、もうほとんどやけくそだった。やるよ。やればいいんでしょ。

意味わかんないけど！

「うん、高崎さん、もちよつと出てもいいよ。いくらモーツァルトでも、規則に縛られる必要全然ないし。楽しもう」

「あ、はい。じゃ、あの……チェロももちよつと前面に出ていただいていいですか？この二人だけのところ」

「J？オーケイ、どんな感じがいい、楽しげな感じ、はずむ感じ、やさしい感じ、ちよつと下品に笑う感じ？アマデウスの映画みたい」

「あはは、ジョージそれうまいねー」

メンバーの人たちとは、顔を合わせてみたら意外とうまく行きそうだということに気がついた。知り合いの女の子はヴァイオリン。四年のきれいな先輩（男）がチェロ。ひとつ下の学年の男の子がヴィオラ。

ヴィオラの子だけは大層無口で読めない感じの子だったけど、それでも音楽はけっこう乗ってくれる感じで、わたしは合うな、って感じをつかんでいた。

「沙絵、このワンフレーズもつとこう、微妙なイントネーションつけられない？」

「どんなよ。イントネーションってただだと、わかんない。ドイツ語的な？」

「あ、そうそう。さすが。ドイツ語、ってうか、オーストリア語のイントネーション。ドイツ語よりはややpolitelyな感じだろ、高級で育ちのよさそうな。もうちょっと、このBをさ、甘く伸ばして」

「お嬢」と私は呼んでいる、ヴァイオリンの沙絵ちゃんと、チェロ科の美青年伊勢先輩がなにやら意味のわからない会話をやりとりしている。わたしは静かにつぶやいた。

「……ポライトリー？」

「あ、ごめんね。丁寧って意味。堅苦しい感じの。丁寧とも言つかない」

にこ、と微笑まれると胸がとろけそうになる。あー、ほんとに綺麗な先輩だあ。まつげ長くて、髪の毛つるつとしてて、鼻高くて、だけど嫌味な感じ全然ない。日英ハーフだから英語べらべらだっていうし。素敵。

瀬川君とは大違いなのに、だけどこの二人って超仲いいんだよね。学年を超えた友情。もっとも、瀬川君が学年の差なんて意識する人だとは思えないけどさ。オケの最中のことを考えても。

「よし、もう一回やろう。タカ、準備いい？」

「はい。いつでもどうぞ」

「いいね、そのノリ。じゃ、いくよ高崎さん」

「はい！」

伊勢先輩がヴィオラの男の子に了解を取って、四人でいつせいに楽器を構える。お互いの顔をうかがって息を吸い込み、音の海に飛び込んだ。

室内楽はうまくいきそうなので少し気分が落ち着いてきて、するとなんだか甘いものが欲しくなってきた。やっぱり女の子にはお菓子とお茶だよ。というわけで、お財布を取りに、楽器をしまいがてら管棟に戻ってみる。

オーボエ専攻専用の部屋の戸を開けて、ロッカーに直行。そしてはじめて異変に気がついた。

「……何コレ？」

ごみが。
入ってる。

くずかごの中身をぶちまけたみたいに、ほこりまみれの紙切れや、油のしみたお菓子の袋、ジュースのペットボトル。遠慮なく私のバッグや、それから、それから……

「——リード!!」

叫んで楽器ケースに飛びついた。
ごみの海のなかから救助するように引っ張り出して、慌てて中身を確認する。オーボエ本体と同じくらい大事な、音を出すために必

要な吹き口、それがリード。特にオーボエっていうのは構造そのものが未完成な楽器だから、自分で削って、水分を含ませて、慎重にリードを育てなきゃならないのだ。

なのに、なのに。

「…………ぐしゃぐしゃだ…………」

心臓が握りつぶされたみたいなショックだった。昨日調整したばかりのリード。削り具合がすごくうまくいって、使うのを楽しみにしてた。しかも、いつもよりいいものを選んだから、値段もすごく高いやつだった。

バイトして、頑張って買ったのに。

「…………なんでえ…………？」

涙が出た。

ごみってなに。

リードが壊れるってどういうこと。

わたし本人ならともかく、わたしの大事なオーボエにまで被害が及んでるなんて。

一体、なにがどうなってるのよ。

「失礼しまーす」

後方でドアが開いた音がした。でも振り向けない。ただショック

で、体の奥底からコールドミみたいなどろどろが出てきてるみたいで、眼も口も開いたまま呆然としていた。

「あの、すいません。3年生の高崎さんという方を知りませんか……って、高崎さん？」

「……はい」

肩のすぐ脇に、人の温度を感じた。わずかに首を傾けてみると、さっきまで室内楽と一緒にやってた先輩。

チェロの、伊勢……

「どうしたの、泣いて、なにが？うわ、リード！どうしたのそれ！？」

先輩は私の顔と手元とぐちゃぐちゃのロッカーとそこからはみ出てる色々なものをすべて交互に見比べて喋った。いつもは穏やかに笑ってるきれいな顔がみるみる青ざめていく。

やさしいひとなんだな。さっきも思ったけど、ほんとにやさしいひとなんだ。

他人のことでこんな顔してくれなくていいのに。

「リード……」

「落としたの？」

「……室内楽から戻ってきてみたら、壊れて……ロッカーの中ごみだらけで……なんでなんだろう、どうして、わけわかんない、なんなのよ？わたしのリード、オーボエ、バッグだって、色々入ってたのに全部ジューズとかでベタベタ……」

「なんてことを」

苦しげに息を吐いて、先輩は私の横にしゃがんでくれた。頭を、肩を、背中を軽くなでてくれて、ごくごく自然に落ち着けてもらえる。うわ、もてそうな仕草だ。

「……誰かの嫌がらせだね。子供っぽすぎる。信じられないよ、大學生にもなって」

「……だけど、なんで」

「考えてもしようがないから。今はとりあえずここを片付けよう。立ち会ったのも何かの縁だろ、僕も手伝うよ。盗まれたものとかない？確認して、あったら学校に届け出よう」

「……はい……。」

てきぱきとした指示にほっとして、ようやく固まっていた手を動かすことができた。花のように開いてつぶれたリードを見るとほんとに心が引き裂かれそうだったけど、もう使えないことは事実だから、片付ける。

結局その後調べてみたら、お財布と授業のノートが二冊、なくなっていた。

伊勢先輩は自分の予定もそっちのけで助けてくれて、結局なんだからその日は帰りまで一緒になってしまった。駅まで送るよ、と紳士的に言われて断るなんてできなかったのだ。

これもなにかの縁だしさ、ほんと。

それに高崎さんは僕の悪友のお気に入りみたいだから。

帰り道、隣を歩きながら先輩の言った言葉に私は弱々しく微笑ん

で見た。

「先輩、お人よしなんです。苦勞してそう」

「あは、仰るとおりだ。自分でもやなんだけどさ、この性格。ただ、どうも性分みたいで。治せないよ今更」

「ところで悪友って、どちら様ですか」

「え、カイだよ。瀬川君。ほら、今度ドヴォルザークのチェロコンチエルト弾く」

……………。

「がん、と頭に衝撃が走った。
わかったのだ。」

「——それだ」

「？え？」

「それだ。ロッカーの犯人……歌苗が言ってた……っ」

後から後から、思い当たるふしが出てくる。

私はうわ、と頭の両脇に手を押し付けた。

ひどい。ひどすぎる。

そういう意味だったんだ。歌苗の言ってた、「やな目にあつよ」
っていうことは。

「……サイテー」

「ちょ、たかさきさん」

ぼろぼろ涙がこぼれてきて、伊勢先輩を心配させた。だけど止まらない。

悔しい。どうしようもなく悔しかった。

（瀬川君にしごかれてるから）

（高崎さんは僕の悪友のお気に入りだから）

つまり、あたしが瀬川君によく名指しにされてるから。

歌苗のような、彼のファンに、嫌がらせをされたのだ。

「あたしの——あたしの、オーボエ」

「高……っ」

「あたしの大事なオーボエ」

私は伊勢先輩が横にいるのも忘れて、その場に膝を折って号泣した。

宣戦布告！？

昔から、私は目立つタイプではなかった。

別に無口ってわけじゃないし、とりたててやぼったいわけでもないけど。ただ派手なのがキライだった。お化粧も濃いのがきらいで、香水とかもどうも苦手。

勉強は中の中、運動神経もそんなかんじ。

だから努力だけはするように心がけた。

見かけも平凡で頭もふつうで、それでいて努力できないなんてやだなって思ったから。せめて自分を誇れる部分がひとつでも欲しかったから、だからあたしは地道にコツコツやるという所業を身につけたのだ。

もちろん、気を抜けばいつでも3日坊主になれるけど、でも3日すぎたら意外と習慣づいて何でも頑張れるから、とりあえず一週間くらいやってみる。一週間できたら二週間やってみる。

そついうのがわたしのペース。

語学でも歴史でも数学でもおなじ。

特に、そのなかでもオーボエが大好きだった。音色が好きで、見かけも好きで、古今東西のオーボエの楽曲が好きで。肺活量が安定してくる中学生頃にやってもいいよって言われたときはうれしかった。

毎日夢中になって触って、それが今も続いている。

リードを自分で作って、湿度管理も大変で、色々手のかかる楽器だけど、でも。

いとしオーボエ。

あたしにとってのこの子は、まさにそんな存在なのだ。

「……伊勢先輩と一緒に帰ってたんだった……」

「……意外とオトコ好きなんだねー、地味なくせて……」

「……あーくやしい、なんであんなのに二大ハンサム持ってかれなきやなんないわけえ？ちよっとオーボエうまいからってさあ、成績が特別いいわけじゃないし。ほんっとフツの子じゃん。……」

ロッカー事件から3日後。再びやって参りましたよオケの練習。後からも前から横からもういやーなささやきと忍び笑いが聞こえるけど、無視。ひたすら無視。かまっていたらこっちまで嫌な人間になるつつーの。

「……高崎さん、どーしたの。顔すげーよ」

「すげーって？」

「……眉つりあがってる」

「十点だね」

「じゅ？なにが？」

「高崎まゆの眉がつりあがってる。つまないダジャレ」

「……ちげー！俺は、べつに！」

「ねー、3楽章のBの部分合わせて。弾き方変えたの。どんな感じが感想聞かせて欲しい」

ばさばさばさつ。と楽譜をめくり、隣の席の中西君にも同様の行動をさせる。なんだか騒音だけでなく嫉妬やらくだらない感情が色々うつまいてるらしいコンサートホールの一隅で、練習に没頭した。

思ったとおりに。がむしゃらに。

リード壊すような馬鹿な奴らに負けるもんか。

ひたすら練習して追い抜いてやる。

「た、高崎さん、ちょっとタンマ……」

「えー。まだだよ！30分しかやってない」

「30分、も！俺、息くるし……」

ふと気づいたら隣で中西くんがゼイゼイ言ってた。まあオーボエよりクラは息使う楽器だからしょうがないかもしれないけど。それにしても張り切りすぎたかな。

「わかった。休憩ね。5分後に再開」

「まじでえ？なんでそんな、はりきっちゃってんのよー」

「これが普通なの！」

立ち上がり、周囲の女の子達から離れるため、飲み物を買いにホールを出た。もちろんこの間のロッカー事件の教訓を身に叩き込んで、あたらしい財布とバッグは持っていく。

いやだいやだ。

友達ばかりの環境の中でこんなことしなきゃなんないなんて。

切なすぎ。

莓オレとバンホーテンのミルクココア、どっちにしようか。

ブリックの自販機の前でうむむと唸る。

どっちも大好物なのだ。

悩みすぎてオーボエを握ってる部分が汗ですべってきた。やばい！はやく決めなきゃ！

よし、ここは……甘さたっぷり苺オレで。

「……」

ガコン。

取り出し口に苺オレが降りてくる。しゃがみこんで取り、やっと飲めるとちよつとモチベーションも上がって再び膝を伸ばしたところ。

「結局そつちなわけ」

「え……うわッ!？」

見上げるほどに背の高い王者が、居た。

「うわってなんだ。オレは魔物か」

「ち、ちがいます。ごめんなさい。驚いただけです」

慌ててあやまりながらも、ちよつと不思議に思った。まもの……ふつーなら、お化けとかが妥当じゃないのかな。

「次、オケだろ。そんな甘いもん飲んでて楽器に影響ないのか」

「あ、あー。だいじょうぶ、です。歯磨きするし」

「時間ないだろ」

「平気です。わたしちょこまかしてるから」

「あー」

っぽいな、と呟いて、瀬川君は自らもブリックでなにやら購入していた。しゃがんで取り上げたものを興味本位で見つめると、キリマンジャロコーヒー。うーん、イメージそのまんまだ。

って、そこまで考えてはっと自分の置かれている状況を思い出した。何やってんだ私。

わたしが今歌苗はじめとするオケの女の子たちに煙たがられてるのはそもそもこの瀬川君が原因で、かれがオケの最中わたしを名指しにして怒鳴りつけるのがうらやましくて憎らしいとか思われててそれを理由にだいじな大事なオーボエのリード壊されたりしたんだよ？

こんな風に喋っていると見られたら、また何されるかわかったもんじゃないじゃん。

「高崎、だっけ」

「っ、は、はい？」

「……何逃げようとしてんのお前。別に俺何もしようとしてるわけじゃないし。」

壁に背を預けてキリマンジャロを飲む瀬川君。わたしは……わたしは、とにかくはやく離れたい。また嫌がらせされる。この子を、オーボエを、どうにかされる。

二度はダメだ。立ち直れない。

「……？急いでんの？」

「い、え。べつに」

「またそれか。べつに、いいえ、あの、なんでもない。お前ほんとはつきりしねーのな。ジョージが室内楽ではすごい演奏してるって言ってたから、多少は変わったかと思ってたんだけど。何も変化なさそうだな。面白くねー」

「そんな言い方」

胸の奥から反抗心が沸き起こった。

誰のせいでこそそしなきゃならないと思ってるんだ。何の責任もないわたしがこんなに苦労してるのは、ひとえにあんたのせいなのよ。学内の王者！

「……。瀬川君」

「あ？何」

辺りを警戒するのも忘れ、私は彼の方へと向き直った。怒るわけじゃない。そんなことができるはずがない。

ただ、悲しかった。

「わたし、弾き方、変えたよ。演奏変えた。少しだけだけど、大胆にして、前に出た」

「……へえ？」

「だから、そういうセリフは、今日のオケが終わってから言っ

なんと大胆不敵な宣戦布告。

言った後にどつと恥ずかしくなってきた。

いくら演奏変えたっていつても、それは元をたどれば彼に色々言われたからであって……つまり、わたしはまた彼をつけあがらせるだけなんじゃないだろうか。結果的に。

「ふうん」

キリマンジャロを飲み干して、瀬川君は紙パックをごみ箱に入れた。投げたわけじゃない、意外と丁寧な所作。

「言うじゃん。オーボエ主席奏者」

自信たっぷりの傲慢な笑みに、なぜか心臓がどくんって壊れそうに貫かれた。

うわ……やだ。

わたし、カッコいいと思った？こんな失礼で怖くて口の悪い瀬川君のこと？さんざん色々言われてきたのに？

それでもその瞳のこと――

「じゃ、楽しみにしてるよ。今日のオケ。」

――きれいだと思った？

「遅刻すんなよ」

瀬川君は言い捨てて、さっさと愛用のチェロと共に立ち去った。残されたわたしは慌てて周囲を確認する。誰もいなかった。だけどそれで安心できるはずもなく、なんとなく場所を移動して買ったままだった苺オレを飲んだ。

……はやく飲んで、はやく戻ろっ。

それでもう一回、練習の前にソロパート通しておこう。

どくどく動悸の収まらない心臓を押さえつつわたしはその後の数十分間を過ごし、結局ホールではなく手近な空き教室にもぐりこんでオーボエをさらった。

そして深呼吸とともにのぞんだ運命のオケ。

わたしははじめて、瀬川君に止められも怒鳴られもしなかった。

胸に生まれたもの

切れのいい音。

正統的な解釈。

ただどこか斬新でエキセントリック、なにより驚くぐらいスケールのでかい演奏。

瀬川君のチェロは本当にすごい。

——つわ、楽しい

オーボエのソロ。ソリストの瀬川君と、オケの中で唯一わたしだけが演奏する部分。

今までは怖くて腰が退けていたその場所を、わたしは今、おもうがままに伸びやかに吹いている。

——たのしい、ほんと、たのしい

瀬川君、挑発してくる。

だけど合わせてくれる。

わたしの音に答えるような音をくれる。

（風景が、わたしの周りを、飛んでるみたい……）

息の苦しさをなんて感じなかった。

ただ、楽しくて。無我夢中で。

嫌なこと問わずらしいことも教授のこと全部忘れて、やりた

いように、やった。

そうしたら、できた。

「BRAVO！」

ソロが終わった瞬間ウィルソン先生が叫んだ。もちろん演奏はそのまま続行だけれど、手が空いてる人のなかでは拍手してくれた人もいる。

瀬川君が、チェロを弾く手を止めぬまま、ちよとだけ私の方に首を傾け、あの傲慢な笑みを見せた。

にやり、って。

大方、「やるじゃん、オーボエ」ぐらいの。

……くやしいけどかつこよかった。
ドキドキしてしまった。

テンションが上がった私はその後も絶好調限りなし、で、周囲の性格悪い女の子たちのこともすっかり頭から追いやられるほど、集中してオケの練習を乗り切った。

グッジョブ、わたし！

るんたかるんたかるんたった。

気分最高。

うーん、やっぱり瀬川君の言うとおりに大胆になってみてよかった。

あんなにオケが楽しかったことって今までないよー。

つきつきで家路につき、駅までの道を歩いてたわたしは、ご機嫌だった。嫌がらせのことは忘却のかなた。なんだか妙に胸が浮き立つ。

と、おやおや。曲がった小路の先に、なにやらうちのガッコの生徒らしきカップルが出現……。

「――て、えっ？」

カップルの服装・持ち物・声をさりげなく観察してみたらわたしは思わず声を上げていた。

長身で、黒のミリタリージャケットがよく似合ってる、まぎれもないチエロケースを背負った男の子。

その男の子の肩下くらいの身長で、つややかに波打つ黒いロングヘア、ちらりと見えた横顔が、まるでどこかの絵画みたいにきれいな女の子。ながいまっげ。輝く瞳。

ふたりとも、すっごく楽しそうな顔で、わらっていた。

笑っていた。あの、彼が。

——瀬川君……？

確認した瞬間、つきんと胸が痛んだ。

ごくごく小さな痛み。それでもたしかに。

わたしはそのことにうるたえた。

え。やだ。なんで。

なんで痛いの。

なんで、シヨックなの？私。

「っは、恩納、超ウケるし。何、じゃあさ、教授にタンカ切ったわけ？授業中に？シヨパンを民族音楽として認めて何が悪いのですかって？」

「もー、そんな楽しそうな顔して言わないでよ瀬川！けっこう修羅場だったんだからね。教授ってばくだらない、前代未聞だ、生徒っていうのは黙ってノートを取ってればいいんだっていうのよ。信じられないでしょう？あまりにもおかしいと思ったから率直に意見を述べただけなのよ。双子は一緒にいたくせにくつつ笑ってるばかりで全く助けてくれなかったけどね」

「ほんと、恩納らしー。最高だよ、そういうトコ」

満面の笑み。こぼれる笑い声。

下品じゃなくて、うるさくもなくて、

ただ耳にここちいいその笑い声が、わたしの心をこんなにも乱す。

女の子を見つめる瀬川君の眼は、あまりにも雄弁だった。もう、口に出してるも同然だった。

『この子が好きです』

『好きで好きでたまらない』

『どうしても一緒にいたいんだ』

「……」

わたしは息を吸い込んだ。

足が、止まった。もう前へ進むような気が起こらなかった。

ブーツの足元で、あの女の子はどうしてあんなにまっすぐ歩けるんだろう。どうしてあんなに、花が咲くみたいに笑えるんだろう。

どうしてあんなに強く、瀬川君の眼を見据えることができるんだろう。

きれいなひと、とてもきれいな人。

「電車間に合うかなー、今日は早く帰らないとまずいよね」

「え？あ、やべ。そーいや夕飯作らなきゃならないんだっけ。恩納、走れる？」

「瀬川こそ。チェロ大丈夫なの？」

「俺は早歩きで十分ですから」

「そーよね、足長いですもんねー」

あまりにも似合いの二人組は、進む速度を上げた。わたしは、動けなかった。

そういえば、あの女の子、すごい有名な子だった。恩納さん、恩納緋乃さんとか言ってたっけ。瀬川君と対を成すっていう位、天才肌の。

考えながら、視線がどうしても地面におちた。灰色をしていた。

……どうしてだろう、少し前に進めたような気がしてたのに。

なんかすごい、置いてきぼりをくらった気分だ。

逃げる。

「……………」

オーボエの部屋を出、管棟をそそくさと後にする。通り過ぎるひとたちの視線が痛い。なにか噂されてる気がする。っていうかされてる。

来たよ。

来たよきたよきたよー。

瀬川君ファン（一部伊勢先輩ファンも含む）の女の子たちによる嫌がらせ第二段が……。

「あれ、まゆちゃん楽譜コピーじゃなかった？なんでそんなに重そうな原譜持つてるのー？」

「……忘れてきちゃったの。図書館であわてて借りた」

うん。これはほんと。昨日あんまり夜家でぼーっとしてたから準備しないでガツコきちゃったんだよね。

室内楽の合わせ三回目。教室を開けてみるとまだ沙絵ちゃんしか来てなかった。

今日も完全に手入れの行き届いたショートボブがつやつや。細い足を包むジーパンも素敵。見るからに教養高そうな女の子なのだ。

「おっはようーう、ごめん、実行委員の仕事が伸びて遅れました！はいこれお詫びですー！」

「あージョージおはよ。遅れたっていつても10分じゃない、べつにそんな気つかわなくてもいいのに」

「ノン！礼儀ですよ、これはね。おはよう沙絵。おはよう高崎さん。昨日のオケ、最高だった」

あ、はあ、どうも。

ドリンク持参で登場した伊勢先輩に恐縮して会釈する。

だってうれしくないわけがない。瀬川君のせいではっとは目立たないけれど、それでも伊勢先輩だってカーナーいいチェロを弾くのだ。一度聴いたことのある、先輩のエルガー。かなしくてかなしくてやさしくて、痛切に最高だった。

「タカがまだ来てないね。——ところで高崎さん、どうしたの？」

笑顔で先輩はわたしの心臓を開いた。

……うあ。いた。

もー、ほんと、お人よしの率直の、やさしいやさしい先輩なんだから。

「また何か『あつた』？」

「はい」

適当にうなづいてみせる。こういうときにか『された』？と聞かないのがひじょうに先輩らしい。

「ええとですね」

「うん」

「そのー、わたしの友達にフルート科の歌苗って子がいるんですけど」

「うん？」

「そのこサックス科の男の子と付き合ってた、だけど別れたらしいです。昨日。歌苗は瀬川君のファンで、どうも本気になっちゃったらしくて」

「……………」

伊勢先輩と沙絵ちゃんが顔を見合わせる。

なんともいえない、微妙な表情をしていた。

「で、ですね。だけど表向きにはその歌苗と彼氏さんが別れた理由が、あたしが横恋慕したからってことになっちゃってるみたいなんです。そういう噂が木管の中で流れてー、わたしもうすごい煙たがられてるの。っていうか憎悪の念を送られてまして。わけわかんないですよ」

「こつちも意味わかんないぞお」

沙絵ちゃんが首をかしげる。髪の毛が右肩の上にさらさらとやわらかそうにこぼれて積もった。ん、教室の後のドアが開いた、と思ったら後輩ヴィオラくんの登場だ。軽く手をふってみる。会釈で返された。

「界くんを好きだとか嫌いだとかいう問題はどうでもいいとして、なんでまゆちゃんがその、歌苗ちゃんたちにとって都合悪い存在になってるの？友達なんでしょ？」

「……うー、少なくとも学園祭オケ組むまでは、そうだったかな」

「なんだその曖昧な言い方はー」

「今はどうも嫌われちゃったみたいなの」

「まあ、まあ、沙絵。あんまり突っ込む話題でもないでしょ」

伊勢先輩が穏やかに割り込んで、沙絵ちゃんは消化不良の顔をしつつも黙った。

わたしはオーボエを両手で握り、なんでこんなことになってるんだと考えを整理しようとする。でもムリだった。わけがわからず。

この後レッスンだしさあ……行きたくないな。

「ま、とりあえず、やろっか」

「ん。」

「まゆちゃん、大丈夫？」

「ん。べつにケガとかさせられたわけじゃないし。やろっ。」

「そうしよう。タカ、準備オッケー？」

「はいはい。待ってくださいよ、いいですよ」

ヴィオラの男の子は松くんというらしい。名前は知らないけど、伊勢先輩はタカと呼んでいる。細身の体が椅子をひっぱりだしてきて一同向かい合う体型をとると、とりあえず音を合わせて、演奏をはじめた。

（歌苗）

かなえ。好き、だったんだけどな。

今でも好きなんだけどな。ちょっとワガママなところはあったけど。

（歌苗。あたしは別に瀬川君と仲良くもないし瀬川君に好かれてるわけでもないよ。好きでもない）

ずき、と胸が痛むのは、きつと息を深く吸い込みすぎたせい。

(……だからもう一度わたしと喋ってよ……)

目を閉じて、わたしは更に音に耳を傾けた。

音楽祭まであと5日だ。

そう。

何を隠そううちのガッコはただ今、年に一度の学園祭直前という修羅場だったりしたのだ。残すは五日。祭は二日間。主な出し物はやっぱり音大らしくコンサートで、瀬川君のチェロコンチェルトはそのなかでも特に目玉だったりした。

よってというかなんというか、校内を飾り付けて各専攻がそれぞれの模擬店を準備する以外の時間は、ほとんど全てそういうコンサート系の練習にあてられている。

かくいうわたしも毎日オケ↓室内楽？↓室内楽？↓レッスン↓まともオケ、というなかなか忙しいスケジュールを組んだりする。だってうちのガッコオーボエ専攻少ないんだよ。下手でもひっぱりだされるんだな。

「お疲れ様でした、お先に失礼します！」

「おーう、お疲れ高崎」

「おつかれまゆちゃん」

「体壊すなよ！」

室内楽を終え、レッスン室に向けて楽器と楽譜とバッグ片手に疾走する。基本的にうちの学校の人たちは皆やさしい。音楽をやって生きているせいなのかなんなのか、楽しくて明るく気のいいひとたちばかりなのだ。……まあ、だからこそ、歌苗たちの行動にシヨックが大きかったりするんだけど。考えるとへこみ出してとまらないから、考えないことにしておく。

「失礼します」

レッスン室到着。ふいー間に合った。

息切れも整えられそうな程度。深呼吸深呼吸。ん。先生がこっち向いたぞ。

……あれ、なんか……機嫌わるそう？

「高崎」

「——はい。」

「ミスター・ウィルソンがオケでのお前のことを大層誉めていたが、一体どんな演奏をしたんだ？」

「え……」

目をしばたいた。

教授の視線が、わたしのことを上から下までじろじろと舐めている。え、何。

何、その……イヤな、視線。

「何度も言っているけどな」

怒っている声だった。明らかに。聞きなれてる声だけど、だけど今日はまだ楽器を取り出してさえないのだ。一体なにがあっただろう。

「高崎。お前はまだ『自分の演奏』なんてもんを求められるほどの位置には来てないんだぞ。むしろ程遠い。ヘツタクソなくせに最近どうも反抗的な態度を取ってると思っていたが、そういうことか。おまえは担当教授である私よりもたまたま今うちの学校に来ているウィルソンの言う言葉を信じるのか。」

唇を、開いたけど、しゃべることなんてとてもできそうになかった。喉が腫れてた。ずきずきして、ひりひりした。

信じるも、なにも。

わたしはただ——楽しく吹いただけです。

「何か言わんか！何だ、その目は？」

その目？

「私のやり方に何か不満があるなら言え。お前はいつもそうやって……自分の勝手にやって……私を裏切る。育ててやった恩も忘れて！」

「裏切る？」

かすれた呟きが腫れた喉にひっかかった。目を見開いていた。

教授の言葉が、信じられなかった。

ただすこし、いつもより遠くまで飛んでみただけ。ただすこし、いつもより楽しんでみただけ。ただすこし、自分に自信を持ってみただけ……。

ただ、それだけのことが、裏切り？

教授への、裏切りになるの？

「お前は落ちこぼれなんだぞ、高崎。それなのに私は忙しい時間の合間を縫っている面倒みてやっているんだ。成績もふるわず、コンクールで入賞したこともなくて、それでいて自由にやりたいなどと、口だけは一丁前に！そういうのは我侭というんだよ！身の程を知らないさい、お前はまだ学生なんだ！」

ばりばりばりって、体が下から上に引き裂かれていくみたいだった。

私のコンプレックス、気にしてること、ちよつとだけ懂れていた未来、そういう場所をすべて刺されて、そこから裂かれる。

いたい。痛い痛い痛い痛い。

胸が痛い。喉が痛い。

涙を――流したかった。

だけど悔しすぎてできなくて、わたしは。

いきなりドアの方へ勢いよく振り返った。
そして叫んだ。

「っ、失礼、しますッ」

「——高崎——！」

逃げ出した。

飛び出して、ドアを閉めることすらせずに、ひたすら。

ひたすら、あまりにも苦しいこの学校から。

ひとの優しさ

『高崎さん』

ケイタイの向こうでのほんとした中西君の声がしたのはそれから大体……大体、何時間くらいだろう。わかんないや。ずっと時計も見ないで、公園のベンチに座り込んでたから。

『おい、どしたのー。何かあったかー。今日はオケ来ないのねー、生きてたら返事してくださいよう頼みましゅから。ね?』

ふざけたような言い方にも中西君なりの気配りが現れている。そのやさしさに一度乾いたはずだった涙がまた、じわっと瞳の奥からにじんできた。すん、と鼻をすすりあげる音に中西君が明らかにびびった空気が伝わってくる。ちょっとおもしろかった。

『た。高崎さん……?』

しばし沈黙。

向こうが口を開こうとした気配。

わたしは、ぽつりと呟いた。

「……わたし、学校やめちゃおっかなー……。」

『え、な、何言ってるのよー!!? だめだめだめつ、駄目だよ! 勿体ないでしょ、せつかく入ったのに!!』

「だって苦しすぎだよ」

『くるしい……って』

「めんどくさい。がんばってもがんばっても認めてもらえないし。あたしはヘタだからヘタなりに努力してるのに。それしかないから。けどだめなんですよ。否定されちゃって、何すればいいのかわかんないの」

「……誰になにされたのー。すっかりすれちゃって」
「なんにも。わけわかんない。全部。それだけ」

オーボエが、吹けるなら、いいのに。

私は、オーボエと一緒にいられるならなんでもするのに。一緒に生きていけるなら、どこにいても、何をしてても。

だけど、きつとあのガツコにいたらだめだなあ……。
あたし、オーボエ、嫌いになっちゃいそう。

「ねー、今どこにいの？」

「さー、どこでしょ。当てたらスゴイ」

あはは、と自嘲ぎみに笑った。

「帰る。ごめんね。オケは休みますって、伊勢先輩あたりにでも言っというて」

「……あ、はあ。りょーかいっす。はい」

中西君はやさしい。

中西君が私の欠席を伝えるであろう伊勢先輩も、とてもやさしい。オケで前の席のチェロの子とか、後の席のファゴットの人とか、歌苗だつて、ほんととはとてもやさしい子なのだ。あたし達は音楽を好きという絆で結ばれていて、そういうひとたちは皆心がやさしいのだ。

だって、音楽そのものが、絶対に誰をも受け入れてくれる、やさしくて大いなる存在だから。

「あーあ。つかれちゃった」

電話を切った後、わたしはしばらく、そのまま公園のベンチに座っていた。

しかあし。困ったのは翌日から。

逃げが許されるのは一度つきりだ。室内楽はわたしがメインだから休めるわけがないし、オケだって二度とんずらしてはあまりにも周囲に迷惑をかけすぎる。レッスンだけはしばらく休もうと腹を決めていたけど、昨日逃げ出した時点で次の試験の点に悪い影響があるであろうことは、もうわかりきっていた。

んま、それももう、しょーがないけどさ……。やつちゃったし。

半泣きの状態であきらめる。とりあえず、今はそれより目の前にあることから片付けよう。うん。今日どーするよ、わたし。サボる？サボって1日家でごろごろしてるか？

…… おおっとお。そんなこんなで頭を抱えている最中にケイタイさんが着信だ。

「はい」

『おわ。意外と素直に出た。……はよーっす。中西です。昨日からストーリーみたいですが違いますよ、だいじょうぶかー』

「だいじょーぶでつす、なに？」

『いや、なにはないでしょ。なには。今日のオケ出るの？』

いつもどおりの私の様子にほっとした感じで中西君は尋ねてきた。かぶりを振る私。

「未定。とりあえず1限はさぼってみました」

『……高崎さんと話したいって人がいんだけどさ。代わってもいい？』

「え。なに、だれ、それ。」

『いや、教えたらずまんないでしょ。いいから、ヘンな人じゃないことは保証するから。いいて言つてよ』

「なにそれー。わかんないよ。名前言つて？え、とりあえず……うん。教えて」

『……ちよい待つて』

ガタガタと、なにかヘンな音がした後、どうも誰かと誰かが喋っているような声。不安を押さえて待っていると、やがていきなり、明らかに中西君のものではない、ぱつと明るく通る声が響いた。

『もしもし。高崎さん？』

うわ！

これは、この甘い声は！

まぎれもなくっ。

「……伊勢先輩！？」

『あ、そうですー、よかった。わかってくれた。室内楽で一緒させていただいてる、伊勢です。突然ごめんね、おはよう』

「お、おはようございます。どうしたんですかいきなり」

かなりどきどきした心臓を押さえてわたしはケイタイを握り締めなおした。うわあ。なんか、汗かいちゃいそうだよ。すごいドッキリ。

「うん、ちょっと連絡したいことあったんだけど、よく考えたら高崎さんのケイタイまだ教えてもらってなくてさ。不覚。昨日才ケ出てなかったけど大丈夫？体調不良？」

「……大丈夫ですよ。全然」

ちよつと泣きそうになりながら答えた。
だめだ。最近、どうも涙腺が弱くなってる。

伊勢先輩つてそういう時に接する存在としては最悪だ。なりふり構わず号泣したくなる。

この前みたいに。

「そつか。じゃあ、今日は会えることを楽しみにしてるね。それでさ、突然なんだけど、ちよつと話したいことがあるんだ。今日、学校の外で会えないかな」

「会っ」

ぎよぎよつとして目を見開いた。学内人気ナンバーワンの先輩とそんなことしたら、わたし、また何か言われるよ！っていうか言われても別にいいけど……あ、っていうか、だから学校の外、なのか。あつたまいい。

「はい、別にいいですけど。でもなんですか、話したいことって」「ん、きつといいことだよ。高崎さんにとって。じゃあ、お願いします。えーとね、何時間で来れる？僕もう学校なんだけど。場所は

指定でいいかな、大学裏の『OFF&ON』。ちょっと遠いけど、あそこくらいしかうちの学校の人がいりびたらない場所ってないからさ』

「あ、はい。オフ。りようかいです。ええと、時間は」

時計を見た。10時半を指していた。

「……11時半で。」

『11時半ね。オーケイ。じゃ、もう一人連れていくけど、よろしく。先ついたら何か頼んで。おごりにしとくから』

「え、いいですよ、そんな!」

『あはは、ごめんもう仕事だ。じゃあね!』
「ずるっ!」

快活な笑い声とともに先輩は電話を切った。

……切ったよ、中西君からの電話だったのに、元々は。

わたしは思いながら顔を上げて、ふっと目の前に置いていたオーボエケースの蓋を開けた。ぴかぴかじゃない。古ぼけてる。

だけどあたしの大事な友達。大事な命。大事な人生。

「……今日1日だけでも、がんばってみよっかー。オーボエ」

とりあえず先輩と会って、その後のことはそれから決めよう。うん。

2人のチェロ奏者

マホガニー材、真中だけすりガラスの、『OFF&ON』と流麗なフォントで書かれてあるドア。ぐっと奥へ押して中にはいる。

鼻に感じたのはコーヒーじゃなくて紅茶の香り。あとケーキが焼かれてる匂い、だ。この独特のこってりした匂いは……チーズケーキかな。

「いらっしやいませ」

カウンターにてグラスを磨いていたガタイのいいお兄さんと目が合った。はちみつ色の短髪……どこかで見たことあるような……。

ぺこ、と軽く頭を下げると、「お好きな席にどうぞ」と手で差し示された。俊敏そうなにーちゃんだ。言われるがままに窓際の席にいつて座り込む。そのまま暖かいからぼやっとしてたらお兄さんがメニューを届けるよりはやくもう一度入り口のドアが開いた。

現れた人物二名と自分の腕時計を見比べてわたしはたまげた。だつてまだ11時15分。

伊勢先輩、はやっ！

っていうか、なんでお連れに瀬川君！？

「いらっしやいませー、おー来たか。もう来てるよ彼女」

「うん、サンキュ。今日のおすすめは？カズ」

「今日はチーズケーキとアールグレイかねえ。グアテマラコーヒーもいいけど。ケーキ食うならたぶん紅茶の方がいいんじゃないかな」

「じゃケーキと紅茶ひとつと……僕はミルクティー。界は？」

「俺もミルクティー」

「りょーかい。座って待っててくんな」

……な、なんだなんだ。

伊勢先輩が顔広いつてうのは知ってたけど、まさかこんな辺境の地までその手が入ってるとは。超親しげオーラ出てたよ。ぽかんと口を開けてると、やがて目の前までやってきたハンサムチェリスト二人。

「おはよ。ごめんね朝から。どしたのびっくりした顔して」

「え、あの、おはようございます。」

「おはよう」

「店員さんと……お知りあい、で？」

「何言ってるんだよ。あいつうちの学校のパーカス科だぞ。四年打楽器の井堀和将。俺のコンチェルトでもティンパニやってくれてるだろーが」

横からの瀬川君の突っ込みに思い切り店員さんを見ていた。ショークースからケーキを取り出してる。

ああ。そうだ。一度打楽器の演奏会って興味あったから聴きにいったことあって、そこで一際かっこいいー！って思ったことあったんだよ。井堀先輩の打楽器。なんで思い出せなかったんだ。わたし。

「で、まあ。カズのことは置いて。本題入りましょうか。」

「あ、はい」

伊勢先輩は人に威圧感なく物事をとりしきるのが非常にうまいと思う。だから自治会長なんかにおすすめされるんだよね。

「まず、一番目。いいことからね。突然だけど高崎さんはダニエル・ヒューバーって知ってるかな」

「オーボエ奏者の？はい、ええ、もちろん。大好きですよ。彼のブラームスのシンフォニーとかサイコウだと思ってます」

「ありがとう。じゃね、これ受け取って」

なぜかお礼を言いながら私のお向かいに腰掛けた先輩は、手にもったたファイルから何かのパンフレットをとりだしてみせた。身を乗り出して見てみる。音楽講習会のパンフ。あ、オーボエ講師ダニエル・ヒューバーさんだつて。うわあ！超行きたい！

「彼ねえ、実は僕の父だつたりするんだな」

……………。

止まった。

なに？

「おとうさん？」

「ええ」

「家族？ダニエル・ヒューバーさんと？先輩が？」

「ええ。……あ、そーか。うん、学校だとね、日本名しか名乗ってないからね。でも正式名はGeorge伊勢・Huberなので僕。似てない？」

「にて……ます。そう考えると」

うわー、と打ちのめされながら私は再びパンフレットを見た。イギリスでやるんだつて。ロンドンの王立音楽院でやるんだつて。いいなあ。いいな、いいなーっ。

つてうか伊勢先輩、あんな有名なオーボエ奏者の息子さんなんだ

……きつとお家とか音楽にあふれてるんだろうな。素敵。

「でさ。父が、高崎さんをその講習会に招待するって言ってるんだ。僕が色々話してあるから、興味もっちゃって。オーボエがそんなに好きな子なら大丈夫だ、ぜひ会いたい、って。もちろん高崎さんが嫌ならいいんだけど、もし参加してくれるなら交通費だけの負担でいいし、僕のイギリスの実家がロンドンへの通勤圏内にあるから宿泊先にも困らないよ。どう？」

もうなんだかわけがわつかんないぞお！

最近のわたしの生活、フツーの日がないっ。

意外すぎる伊勢先輩の言葉にただただ目をむくことしかできない。ずーっと黙って頬杖ついてた瀬川君がぼそ、と小さい声で突っ込んできた。

「行ったほうがいいよ高崎」

おまえの音楽は多分、日本じゃ潰されてしまうから。

「……」

顔を上げた。瀬川君はいつもどおりのクールな表情。数日前にはあーんなに甘い顔で恩納さんと一緒に帰ってたくせに。なんだよ。ウケますよそのギャップっぷり。

っていうか、そう、そうかあ。日本じゃ、潰される、かあ。

……たしかに今、あんまり楽しくないけどなあ。

「高崎さん？イヤ？」

「いいえ」

首を振った。よし。決めた。

「参加させていただきます」

学校なんかどうでもいい。

教授のこともどうでもいい。

大好きな音楽と、大好きなオーボエと生きるため、少しだけ。

少しだけ、勇氣出してみよう。

「お話中失礼しますよ」

その後しばらくたってから井堀先輩がテーブルまでやってきた。もうお茶もケーキも届いているというのに。一体なぜ。

伊勢先輩と瀬川君も同じことを思ったらしく顔を上げた。

「なにカズ」

「お勘定は早いですよ」

「ちげーっての。」

ややむっとした顔で井堀先輩は答えた。
わたしを見て。

「オーボエの子だろ。オケの」

「え。あ、そうです。高崎です。三年の」

「ちよーっと俺きみに関してムカツクっていうか酷い噂聞いたんだけどさあ。言ってもいいか。っていうか言っぞ。ジョージとカイもそのこと話そうとしてきたんだろ」

「……まー、推測するにおそらくは、ね」

「その通り、なんだろうなあ。」

「……？」

伊勢先輩と瀬川君が顔を見合わせて苦笑した。

わたしはひとり意味がわからず。「何ですか」

とたずねたところ。

「いやあ、ははは、あのさ。自分たちで言うのもすごいやなんだけど。」

伊勢先輩の笑顔が引きつった。

「はあ」

「その……高崎さんに対する、悪口とか。嫌味とか。聞こえてくるのさ。オケの時間とか他の時間とかに」

「えっ」

「俺も直接耳にした。でもその言い方があんまり一方的すぎて、っていうかお前がそんな事言われてもあんまりフツーにしている姿がむかついたりしたんだが、まあとにかく腹が立ってしょうがなくて、聞いただしたんだよ、木管の女一人。」

ええ！

い、いつの間にそんなことを。

「なんで高崎がそんな目に合ってるのか理解できない。お前絶対人

に嫌われるタイプじゃないだろ。はつきりしなくて苛々することはあるけど」

瀬川君はいつも一言多いんだよ！
ほっというて。

「で？」

「……で、還ってきた答えが」

「伊勢先輩と瀬川君にちやほやされててムカツク」からだそうで

「ほんと傲慢この上ないんだけど、悪い。おまえがいやな目にあってるのって、俺らのせいなんだろう」

――。

息を止めた。

視線をテーブルへ落とした。

あやまった。あの瀬川君が、あやまった。

胸が痛み出す。

最近瀬川君を見るとこうだ。ちくちくする。

なんだろう、あやまってほしいわけじゃない、っていうか、あやまってもどうにもならないことだと思っただけ。

だけどなんか、嬉しかった。

わたしはちゃんと認められてるって。

わたしのことを気にかけてくれるひとがいるんだって。

喉がちょっとだけ、熱くなった。

歌苗

「じゃあ、ごちそうさまでした」

「イエイエ。またいつでもいらっしやいな、高崎ちゃん。なんかあったらいつでも言えよー、俺にはフルート科の大親友がいるからな内から守ってやれるよ」

「まも?」

「そうそう。大事なオーボエ奏者ですから。いなくなれると僕も界もオケの皆も困ります」

「……はあ。」

「ったく、相変わらずそんな曖昧な返事しかないんだな。もちよつと自信持てよお前」

うめくみたいない低い声と一緒に頭をぱかって叩かれてた。痛いし！瀬川君とわたしの身長差から考えると、それ絶対バイオレンスだし！

「じゃ、いこ。カズ、またあとで」

「おう。お疲れさん」

「ご馳走様な」

男の三人は声を掛け合い、別れた。わたしも続く。すごく軽く、だけどホントに仲いいんだろっとなあって思わせるやりとり。

「仲よしさんなんですな」

横に並んだ伊勢先輩に聞いてみる。と、

「そうだねー、腐れ縁みたいな。楽なんだよ」

にこり、といつもの笑顔が返ってきた。
「楽かあ、とわたしはちょっとうらやましいような気持ちでつぶやいてみる。」

「そういえば今わたしにそーゆー友達っていないなあ。皆に煙たがられてるし。」

「……高崎は高崎の求めるもんがあるところで、ちゃんとそういう奴ら見つけられるよ。」

「え？」

「うん。僕もそう思う。大丈夫だよ」

「そんなにオーボエ好きなんだからな。」

「そうそう。がんばれる力があるんだから」

「……」

少し前を歩く瀬川君に、隣を歩く伊勢先輩。
ふたりして何だかすごく、気を遣ってくれてるみたいでくすぐったい。だけどうれしい。

「……ありがとうございます。」

「つてことで、今日のオケには出るようにね」

「え。嘘、そのためだったんですか!？」

「あははー、まあ、二度は駄目でしょう。ねえ界？」

「当たり前だ。あの曲にどんだけオーボエのソロがあると思ってる。昨日も大変だったんだぞ、セカンドオーボエに代わりやってもらったのはいいものの、そいつヘタクソで……」

瀬川君の毒舌がはじまった。

伊勢先輩が隣で明るく笑い声を立てて、わたしはうえーと泣きそうな顔。

学校まではずっと坂道。

誰かに見られそうな位置まで行ったら離れるよって伊勢先輩が約束してくれていたけど、だけどわたしはちよつとだけ、このままでもいいのになあって思った。

なんかすごくうれしいから。

「界、次の時間なに？」

「んー、多分声楽科のゲストのイタリア人の接待と、続けてオペラのドイツ語字幕の翻訳作業手伝い。」

「あいかわらずクリエティブな仕事してるね。でも、ドイツ語だったら緋乃も呼んで一緒にやったほうが早いんじゃないの？」

「あいつは室内楽の練習だとき。時間ずらしてくれよって言ったんだけど」

「断られちゃったんだ？」

「……うん」

むーっと、ききわけのないコドモみたいに拗ねた顔をする瀬川君。伊勢先輩が心からおかしそうにくつくつと笑って、わたしは対して興味のないふりを装いながら、またも登場した「彼女」の名前にひじょーにうるたえていた。

緋乃、って、恩納緋乃さん、だよな。

最近やたら目にする、知性と美しさあふれる才女。去年先輩たちのオケをバックにピアノコンチェルト弾いてたな。ベートーヴェンの『皇帝』。ソリストに見惚れて団員たちがミス連発、とかいう話があつてそんなバカな！って思ってたけど。

……彼女ならありえるかもって、今ならナットクする。

「この間一緒に帰ったんでしょー」

「な。んで、知ってんだよ!？」

「目撃情報多数。めっちゃデレデレしてたって。界が。お似合いすぎて近づけなかったってもっぱらの噂」

「う……」

噂にまでなってるのかよ、と赤い顔でつぶやく瀬川君を、見ないようにした。うん。なんか見るのやだから……見るのやめよう。大丈夫。もう学校見えてきたし、すぐに別れるし、って……わかってるのに。

——やだなあ。

わたしは顔をしかめた。

なんでこんな、胸がひりひりするんだろ。

歌苗が話し掛けてきたのはその後すぐ。

オーボエ科の模擬店を準備していて、重い重いアイスクレーパーを一人でえっちらおっちらと運んでいたわたしの、横を彼女が通り過ぎようとして。

「あ」

目が合ってしまった。思わず声を上げていた。

歌苗は一瞬怖いぐらい無表情な顔をして、だけどそのあとにちょっと、ぎこちないように、笑った。

笑ってくれたのだ。

「かな……」

「重そだね。手伝うよ」

そしてなんだかよくわかんない内にアイスクーラーがひょいっと軽くなって、わたしは歌苗と一緒に校舎の入り口へと歩いていった。運んでいる間は終止無言。気まずいことこの上なかった。

「……よしよ、っと」

目的地に到達し、アイスクーラーを地に降ろす。歌苗とわたしは向き合って——彼女は、つぶやいた。

「ごめんね。まゆ」

ずきんって言った。

胸が。

あやまれるような関係じゃなかったはずなのに。

「歌苗」

「こんなくだらないことでキレて。勝手して。ほんとごめんね」

謝罪なんだか独白なんだかよくわかんない言い方をして、彼女は気がついたらあっという間に離れていった。あ、と思わず口から声もれる。手を伸ばそうとして、だけどそれは重かった。

（歌苗）

ごめんねって、なに？

（歌苗） あやまるくらいなら、どうしてあんなことしたのよ

言ってくればよかったのに。

瀬川君が好きだったんだって。

わたしみたいな全然カンケーない子までうざくなっちゃうくらい好きなんだって、そう言ってくればよかったのに。

わたしは別に彼のこと、なんとも思っていないんだから――。

「もう戻れないのかなあ」

つぶやいた。

悲しかった。

けっこう歌苗のこと好きだったんだなあって、今更になって確認した。

彼女は、自分のやったことで私がこんな状況になっただけで楽しいんだろっか。

それほどまでに私のことを憎むようになっていたのだろうか。

友達として隣にいた時から、ずっと、わたしのことが憎かったのかな……。

模擬店の方に帰りながら思いついた考えに、われながら打ちのめされた。いや、それは、あまりに……きつすぎるよ。やめてやめて

歌苗自身の口からきいたわけじゃないし、ききたくもない。

音楽祭、終わったら。

フツーに、なれるかな。
歌苗と。

ありがとうの歌

そして。

小さないざこざは色々ありつつも、まああつという間と言える程度
の速度で時が過ぎ。

気づけば音楽祭前日。

わたしは奇妙な事態に気づき始めていた。

『ええと、じゃみなさん、とりあえずお疲れさまでした！まだち
よこちよこと手をいれなきゃならないところがありますが、今を持
って音楽祭準備の終了を宣言いたします』

グランド内特設ステージにてマイク片手にいつものスマイルを見
せているのは伊勢先輩。もと我が大学自慢の自治会長。オンナノ
コたちは多かれ少なかれみーんなそっちの方に目を取られる。あ、
でも先輩は弦専攻だから弦と仲悪い管楽器生徒はわざとシカトして
いるな……うーむ、人間関係ってむずかしい。

どうでもいいことを考えて現実から逃避しようとする。なぜなら。
なぜならなぜなら。

『さて、さて。じゃあここで、今まで頑張ってくださいた皆さんに
対して執行委員長の方からご挨拶いただこうかなあと思います。恩
納絳乃さん——どうぞ』

とたん、グランド中の空気が変わったぞ。それはもう、ばばばっ

と。皆ステージを見た。管楽器でさえ。羨望と憧れの眼差しが見つめる先には知的な才女。

『こんばんは、おつかれさまです。執行委員長の恩納です』

キレイー、という感嘆の声があちこちから聞こえた。異論なし。このひとくらい飾らないで華やかで、凜とした美しさをもつひとつて見たことないよ。全然派手じゃない。だけど誰よりも華やか。

『皆さんが頑張ってくれたおかげでどうやら居残りもせずに済みそうです。今日のはやめにおうちに帰って、ゆっくり食べてゆっくり休んでくださいね。もちろんそれで明日寝坊しちゃっても困るのですけど、逆に言えば多少寝坊しても大丈夫な位、準備はよく整っています』

つんとしていて。高貴でプライドが高いようできて。だけどこういう場に出ることをためらわない人格のよさがある。人を思いやれる心を持つてる。

『執行委員長なんて大げさな言い方にはまだ抵抗がありますけど、だけどその場所から見るとこの大学は、とてもすてきです』

勝てない。そう、思う。

勝負などするつもりもないけど。

『執行委員長をやらせていただいたてうれしい。ありがとうございます。今ここで、皆様と一緒に音楽祭を作り上げられていること、ほんとうに嬉しく思います。明日からまた頑張りましょう——以上！』

歓声、拍手、それに照れたようにさっと引っ込む恩納さん。赤く

なった横顔がかわいかった。

——瀬川君が魅了される理由がよくわかる。

だけど、それでも、いま胸に刺さる痛みはもう、隠しようがないのだ。

『じゃ、次は瀬川界君。あ、ちょっと、逃げちゃだめだよ逃げちゃ』

あははと起きる笑いのなか、心底面倒くさそうにステージに現れた瀬川君。

その立ち姿を認めた瞬間、わたしは何ともいえない空しさにおおわれていた。

『あー……とりあえず、お疲れ様です』

怖い位低い声。無愛想な言動。

鋭い目は自分以外が認めた人間以外には向けられもなくて、だけど、ほんとうはいい人。

他人を認めるということを、ちゃんとしてくれる人なんだ。

『正直こういう場所で喋るのってあんまり得意じゃないんですけど』

歌苗の、気持ちさが、わかってしまった。

『けど、今回の音楽祭は俺自身にとっても印象深い祭になりそうです。色んなことがあったし、これからあるとわかっているのです。それを共に体験できる皆さんには、大きな親愛感を感じています。ありがとうございます、お疲れ様でした。今日は早めに帰って、よ

く寝てください——誰かもさつき言っただけ』

こんな遠くから見つめるだけ。

多くの人にとって瀬川君ってそういう存在。

歌苗もきつとそうなんだ。だから、たとえ怒りでもなんでも、瀬川君に面と向かって感情をぶつけられてるわたしがうらやましかったんだ。

わかった。わかってしまった。

だってわたしは今。

今、恩納さんが……どうしようもなくうらやましい。

「音楽祭のチラシできたよーっ」

オケの時間。

コンミスの先輩（伊勢先輩の双子さん）からばらまかれたかったいいパンフレット。

そこにはセンスのいい金文字で、あのコンチェルトのプログラムが印刷されていた。

STUDENT・S ORCHESTRA PROGRAM

第一部

J・Haydn

Symphonie Nr. 98

C・Debussy

Prelude à l'après-midi d'un faune

*INTERMISSION

第二部

A・Dvorak

Cello Concerto

Soloist*瀬川界（本学三年）

指揮 Edward Willson

管弦楽 Student's orchestra

「……」

プログラムの中ほど、しっかりと印刷された彼の名前。ちくり、と止めようがなく胸が痛む。

もう、それがなにか、わたしはとっくに知っていた。

——ちいさなちいさな欠片。

胸に芽生えたもの。

育てるつもりはない。

面と向かうつもりも、なかった。

ただ、ああ、なんだかなあって気持ちで、見つめてた。

（最初は、怖かったのにね）

瀬川君のこと、怖くて怖くてたまらなくて、苦手だったはずなのにね。

（だけど、嬉しかったから……）

わたしのことをひとりの音楽家として扱ってくれたことが。もったいないよって言ってくれたことが。

すごく嬉しかったから。

喉が熱くなっただから。

だから、頑張るの。

あたしはまだ頑張れるよ。

ありがとあの想いを、オーボエに込めて歌にするから。

流転

どれだけ回りの環境に変化があっても、結局自分を動かすのは自分ではないんだ。

とても厳しい意見。

だけどほんとうのこと。

乗り越えるまでは辛いけど、乗り越えた後にはきつとすごい景色が待っていてくれるんだよ。

「Bravo」

「Brava」

「Bravissimo!」

拍手。拍手喝采っていうんだ、きっと。こういうのが。

音楽祭1日目。二つこなしてるオケのうちの片方が終わった。曲目はベートーヴェンの「英雄」、ブラームスのシンフォニー第一番。どっちもオーボエが目立って目立ってしょうがない曲で、教授にはさんざん怒鳴られて馬鹿にされて、このオケには普通のメンバーとして参加してる瀬川君やコンミスの先輩にもかーなり色々言われたりした。確かにした。

だけど、だけど今、わたしの目の前に広がる光景は。

「よかった！高崎ちゃん！」

「鳥肌立ったよまゆちゃん」

「ほんつとすごかった！ねえ、もう一度立ってお辞儀しなよ！」

驚くしかない、賞賛の雨だった。

ホールの中は熱かった。演奏の後はいつもそう。それがたまらないの。自分のオーボエを誰かが聴いてくれる、それだけでわたしは幸せなの。

わたしがこんなにも短期間で前へ進むことができたのは、一体なんのため。

周りの人、教授、歌苗、イベント。

そのどのためでもないのかな。

頑張りつつけても無駄なことなんて、もしかしたらこの世には一個もないのかもしれないな。

音楽とかスポーツとかだと、才能というものの差は残酷すぎるほどハッキリしてるって思ってたけど。

だけどどんな小さな場所でも、世界でも。

自分が大好きな「もの」と生き続けていくことはできるんだ。

あたしのオーボエは必ずあたしに答えてくれる。

頑張り、つつければ。

「おつかれ高崎さん！ますます伸びやかになったね、すごいよかつ

た。室内楽も楽しみにしてるよ」

オケが終わって話し掛けてきたのは伊勢先輩。まだまだ周囲にいっぱい人がいるというのに、なんて大胆な！と仰け反った。でもまさかシカトするわけにもゆかずですよ、頷いたり答えを返したりしていたところ、また例のカゲグチが背後から……。

「……またジョージさんと喋ってる。なんかさー、あの子最近、絶対チョーシのってるって」

ひいいつ。あれ、オーボエ科の先輩だ！同じ専攻の先輩にいらまれたら私、ほんとこの学校内で生きていけないじゃん。
しかも、更に、

「うちの歌苗ちゃんの彼氏よこどりしたとかゆー話だしね、オーボエにしかキョーミなさそうな顔して、やることエグイよねー」

……おお、フルート科の先輩までもが。

と、さすがに顔に出たのか、伊勢先輩がそこではじめてあ、と言った。言っただけいいけど、その後が悪い。

「ごめん。忘れてた」

「もう遅いですよ……」

「じゃなくてね、今カイの機嫌、すっごい悪いんだ」

「瀬川君の機嫌がなんですよ？」

すっごい怪訝な顔をしたと同時に、後からだん、という鈍くて重い音がした。振り返る。

……確かに不機嫌極まりない顔をした瀬川君がカゲグチを叩いて

いた先輩たちの後ろに現れた所だった。

彼が一言二言何か喋る。先輩達が真っ赤になる。でもべつに嬉しいことを言われたわけじゃなさそうだった。むしろ逆の意味合いみたいだ。

先輩達が答えることすら許さない勢いで物申しを終えると、瀬川君はわたしと伊勢先輩の方に眼を向けて軽く片手を上げ、そのまま逆方向の人ごみの中へと消えていった。残されたオーボエとフルートの先輩も、なんだかいやにそそくさと……。

伊勢先輩がくすくすとわらいながら、呟いた。

「界は正義感強いからね」

「なに……したんでしょう」

「さあ？ 大方さっきのオケのダメ出しじゃないかな。天才の権限だよ。先輩にも大きな口で物を言える」

ふうん、とわたしは喉を鳴らした。

嬉しくて、不安だった。また何か起こるような。あの先輩達が、また何かわたしにしてくるんじゃないかと……すごく、すごく。

だけどその予感間違っていた。

何も起きなかったのだ、その後は、結局。

——あの先輩達による、「何か」はね。

「高崎！」

事件が起きたのは午後。

室内楽のステージが始まる50分程前。数日前カフェで目にしたばかりの井堀先輩が、ものすごい速さでオーボエの模擬店前にスライディング。

「あー、カズ先輩、お疲れ様ツす。どしたんすかそんなに焦った顔して」

「高崎、いるか？高崎ちゃん」

「高崎まゆ？いますよー、そこで焼き鳥焼いてる。おいで高崎、俺が代わるから」

「ありがとうございます。カズ先輩？どうしたんですか、私なんかのとこに来て……」

「高崎ちゃんオーボエどこに置いてる」

びくん、と体がひきつった。

オーボエ？オーボエは肌身はなさず身につけてて、今もお店の中に持ってきてて、その椅子の上に――

「――えっ」

青ざめた。悪夢だと思った。

恐怖のあまり吐きそうになる。膝が崩れてよろめいた。

ない。

オーボエがない。

「――ウソだッ！！」

叫んで椅子に飛びついてた。バッグはある。楽譜もある。衣装もある。だけど、だけど、楽器が……オーボエが、リードが。

どこにもない。

「ウソ、いや、やだっ！ウソだよねっ？」

「……高崎ちゃん。聞いて」

「先輩、なんで？ねえなんで？」

「聞いて。俺の大親友がフルート科にいるっていったら、そいつがな、聞いちまったっていうんだ。キミのオーボエを——」

「あたしのオーボエを？」

世界が真っ白だった。

何も考えられなかった。

カズ先輩の次の言葉を聞いた瞬間、全身で絶叫していた。

「キミのオーボエをどうにかしてやるって騒いでた後輩がいるって」

——歌苗

「歌苗——！」

終わっちゃった。

「高崎ちゃんっ」

「高崎ー!？」

「どこいくのっ!」

走り出していたわたし。

模擬店を飛び出した。グラントは何か騒然としていた。事件が起きているらしい。お向かいのトランペットの店から怒声のようなものが響いてる。

「……っ、自治会長呼んだほうがいいって!」

「伊勢先輩すぐ来るってよ!」

「こんな騒いじやったら、音楽祭中止に――」

聞こえない。

何も聞こえなかった。

走って、泣きたくて、怒ってて、憎くて、いろんな感情が喉元まであふれていた。吐き出したかった。返して欲しかった。

あたしの大事なだいじなオーボエ。

「うわっ。……ごめんなさいっ大丈夫!？」

校舎のエントランスで誰かとぶつかった。顔を上げる。かなり焦って厳しい表情をした伊勢先輩だった。よく会うな。っていうか、先輩が学校中を忙しく飛び回ってるだけか。

「——高崎さん？」

体勢を立て直してまた走り出す。
後ろで先輩を呼ぶ声がした。

「ジョージ！」

「カズ？彼女、いったい」

「俺がついてくから、おまえは自治会長の仕事しろ！マリが暴れてお客が混乱しちゃってんのよ、うまく謝っていさめといてくれ！お前の双子だろ！！」

「ああもーマリーー！！」

お祭のせいで皆少なからずおかしくなってる。

だからかな、歌苗のしたことは。

だけどあたしは許せない。

もう歌苗のことを許せない。

だって、あたしがオーボエを何より大事に思ってること、一番近くで見ってきたのは歌苗だったんだもん。

（ごめんね、まゆ）

あの言葉にはきつと、続きがあつた。

（ごめんね、まゆ。こんなくだらないことでキレて。勝手して。ほんとにごめんね。）

だけどあたし。

それでもあたし、あんたを憎むことをやめられないよ。

オーボエがなきゃあたしは飛べない。
あの子はあたしの大事な一部。

返して。返して。

「……歌苗っ……！」
「たーかーさーきーちゃんっ」

おいけてくるカズ先輩と一緒に、人ごみでこつたがえす校舎内を走っていた。

室内楽が始まるのは4時15分。今は3時40分。ほんとならもうホールでスタンバイしてなきゃいけない時間帯。ただでできるわけない。あたしには楽器がない。フルート科の部屋に飛び込む。お約束のように誰もいなかった。

「どっ」

涙目になってきた。手足のバランスがとれない。息がうまくできないよ。オーボエがない。

「どっ。あたしのオーボエ」
「……ミズキ！」

カズ先輩がいきなり叫んだ。と思ったら、後からふんわりいい匂いがして、誰かが駆け込んでくる足音がした。振り向いた私はすごい形相をしていたらしい、足音の主らしい小柄な女の子はびっくりしたように大きなおおきな目を見張った。

「ミズキ。お前が止めたっていう後輩は？」

「……それが、見つからなくて。ごめんなさい。あなたがオーボエのひとだよな？ごめん、止められなくてほんとうにごめんなさい」

青緑の目、だった。驚いた。真つ白い肌にほとんどそれと同じような色彩の金色の髪。外人さん。かわいい。めちやくちゃかわいかった。

「フルート科4年の浅野です。一応リーダーでもあるの。歌苗ちゃん、馬鹿なことしないでつて止めたんだけど、音楽祭でフルートの出番多いし、まさかずっと拘束してるわけにもいなくて……気がついたらいなくなつてて、」

「あたしのオーボエがないんです」

歯をくいしばりながら言った。浅野さんという先輩は大ショックを受けた感じでカズ先輩を見上げた。カズ先輩はうなづいた。

「店に置いておいたんだつてよ。俺が行った時にはもう遅かった」

「歌苗ちゃんのスケジュールは確か、次が本館小ホールで室内楽……」

……

知ってる。歌苗本人が言つてた。歌苗は室内楽を一件しか引き受けていなくて、だけど弾けなくてわたしがうらやましいって言つてた。

まゆはいいね。うらやましいくらい音楽バカで。オーボエうまいから。

「……ありがとうございました」

「あ、またそやって一人で行く！待ちなさいって！」
「ほんとついでにこなくて大丈夫ですから！」

また走り出す。管棟から本館へはこの階にある渡り廊下を渡ればすぐ。息が切れて苦しい。だけど心はもつと苦しいよ。
カズ先輩がすぐに追いついてきて私の肩をつかんだけど、振り切った。

「たかさきちゃん！」

「いーですってば！」

「いーじゃなくて、誰かいないとキミ、木管の女子にいらまれてんだろ！？何されっかわかったもんじゃねーじゃん！」
「……っ」

正しいことだった。なんでこんな状況になっちゃってるんだろう。ホントわけわかんないよ。皆友達だったんじゃないっけ。入学してからずーっと、いつも一緒だったんじゃないっけ。

あたしってそんなに、憎まれてたのかな。

ボタン！と音を立ててホールロビーの扉を開けた。何事だと周囲の視線が集まる。コンサート委員が立ち上がって非難した。

「演奏中です！走らないでくださいっ」

「わりいコンサートスタッフ、緊急事態！」

「え、い、井堀先輩っ？」

ホールの楽屋は二つある。下手と上手。上手は男子が使ってるから下手側に回った。さすがにカズ先輩がひるんで走る速度を落としたのが感じられた。そうそう、それぐらいでいいよ。

こつから先、あたしと奴らの問題なんだから。

ノックなんかもちろんしないで楽屋に駆け込む。木管金管弦楽器、色んな科の女の子たちが本番ようのおめかしをして待っていた。百花繚乱？まさか。こんな奴らにそんな言葉使ってたまるもんか、と思った瞬間、わたしの体を思い切り押しのけて飛び出してきた子がいた。

「——かなえっ！！」

絶叫して追いかける。色んな人の好奇の視線が感じられた。歌苗は黒い楽器ケースを抱いていた。あたしのオーボエケース。

追いかける。

走る。

ロビーを出ていくときにちょうど室内楽のメンバーが入ってくるところだった。沙絵ちゃんと松君。二人ともあたしが衣装に着替えもせず走ってる姿を見てあっけにとられていた。

松くんが私を見てなにかを小さく叫び、スーツのポケットから携帯電話を取り出したというのがわたしの見た最後のシーン。

歌苗を見失わないよう、もうゼイゼイしている息を飲み込んで、痛む脇腹もムシして、人並みの間を縫う。そして階段に差し掛かった時、歌苗がすでに着替えていたことが裏目に出た。

ヒールの足元が、かしいだのだ。

「歌苗ッ」

わずかな間を逃がさず、悲鳴に近い声を上げて彼女の肩を捕まえる。乱れた髪の間から憎悪に燃えた目がわたしを見ていた。そんな目をしてやりたいのはこっちだと思った。

「歌苗ッ、なんでよ、なんでなのよっ!？」

だから、叩いた。
頬を張った。

今の今まで友達だと思っていた、ううん、そうでありたいという希望にすがりついていた人物との縁を、わたしが本当に断ち切った瞬間だった。

「返してよ、あたしのオーボエ、あたしは、あたしは、あたしはあなたのこと——っ」

逃げようと体をよじる歌苗を、乱暴なぐらいの力で押し留める。
わたしの手も痛くなった。それぐらいの力で。

「——あなたのこと、好きだったのに!!」

髪を引つ張った。少し前ならわたしが結ってあげたりもしていた髪を。服を掴んだ。わたしと一緒に買いに行った服だった。

歌苗。かなえ、かなえ、かなえ。

大好きだった。大事だった。
数え切れないくらいたくさん、隣にいた。笑った。話した。弾いた。なぐさめた。

だけでもう、

「返してよ！」

もう、その日々は戻らない。

終わっちゃった。

彼女は叶わない片思いの悲しみを、苛立ちをぶつける相手としてあたしを選んだ。音楽への愛情と才能を持てない自分自身への憤りを、あたしにぶつけた。

だからあたしも許さない。

「あんななんか……」

息を吸った。

もう一度頬を張った。歌苗が何か言い返そうとあたしを睨みつけて口を開く前に、あたり一面に響くような声で、言っていた。

「あんななんか、大ッ嫌いなんだからっ！！」

堪えていた涙がぼろつとこぼれ出すのと、歌苗があたしのオーボエケースを両手にもって高々と振り上げるのは、同時だった。

好きな人

いや！

歌苗の、手が、あたしのオーボエケースを振り下ろす。
床に。

コンクリートの、床。

「ッ」

「馬鹿、何ぼーっとしてんだ!？」

あまりの恐怖に悲鳴すら出せない。体も動かないまま、なすすべもなく、自分の半身が壊されようとするのを見送ろうとしていた時、
そう誰かが叫んだ。

あたしは我に返った。そして――

歌苗を、止めることができた。

「……間に合った」

「おせえんだよジョージ。よかった、高崎」

わたしの後ろから息を乱しながら言ったのは、伊勢先輩と……それから、それから、どうしてか。

瀬川君だった。

「大丈夫か？」

問いかけると、どっと体から力が抜けた。安堵が押し寄せて、
だけどもまだこの上なく悲しくて悔しくて、涙をこぼしながらオーボ
エを胸の中に引き寄せた。

「ごめん。俺らのせいなのに、もっと早く気づけばよかった。松が
——お前たちと組んでる室内楽の後輩が、教えてくれて。カズから
も電話きたし」

「……」

「ほんとうに、ごめん。高崎の手足を、みすみすもぎとらせるところ
だった」

瀬川君の手が。他の人じゃありえない、その大きくてしっかりし
た手が。わたしの頭に置かれる。何度も言われた。ごめんって。聞
いたこともないくらい恥じ入ってる彼の声の向こうで、伊勢先輩が
歌苗のことを片付けていた。

「ねえ、なんでこんな意味のないことしたんだ」

顔をあげられない。

涙がこぼれて、しゃくりあげて、周りにいっぱい人がいてざわ
ついているのがわかった。

はずかしい。けどうれしい。けど——切ない。

「音楽家にとって楽器は命だろうか？高崎さんは頑張りやで、一途に
音楽が好きで、オーボエが好きで——だから僕は彼女のことが好
きだった。彼女のオーボエが好きだった。なのにそのことがまさか
高崎さんをこんな目に合わせるなんて思いもしなかったよ」

伊勢先輩が怒っているところははじめてだった。いつも笑っていて優しい先輩。こんなにも厳しい声を出せるなんて知らなくて、私でさえ怯んだ。直接言われている歌苗が怖くないはずがない。

「だって」

と、彼女がやっと発した言葉はかすれて震えていた。

「まゆは、あたしと一緒にこの学校に入って。あたしと一緒に勉強してきたはずなのに。いつもまゆが上だった。あたしはまゆより音楽を好きになることができなかった。やらされてやってきたフルート、嫌いじゃない、だけど——なんでやってるのかわかんなかった。まゆを見るとそれがなからうらやましかった。ムカツいた。先輩たちにもいつも誉められてるの知ってたし。それなのに自分に自身が持てないと言ってて、ふざけんなって思ってた」

わたしは聞きたくなかった。オーボエケースの中身を開けて、楽器が無事かどうか確認しながら、心がずたずたにされていく感覚をやりすごそうとした。むずかしすぎて、体中ががたがた震える。

「あたし、もう今年いっぱい学校やめるつもりだったし。つまらないから、居ても意味ないって思って、だから、もう何してもいいって思った。まゆが許せなかった、恵まれてるまゆが——」
「——恵まれてるのはお前だろ？」

今までわたしの様子を黙って見下ろしていたらしい瀬川君が、歌苗の言葉がある時点まで来た途端、いきなり彼女に向かって怒りを露にした。

「高崎は与えられた分努力してる。おまえはただうらやましがって

騒いでるだけだ。つまんないから学校やめる？ああ、どうぞやめろよ。けどな、続けたくても学校続けられない奴が居るってこと、勉強したくても出来ない奴が居るってこと、考えてみるよ。……音楽を続けたくても続けられない奴がいるんだ」

「カイ」

「最低だ」

吐き捨てて、瀬川君は私を立ち上がらせた。

涙に濡れた視界の向こうに、ひどく醜悪な表情をした歌苗がうつっていた。

伊勢先輩が腕時計を見る。そして言った。

「室内楽、もう始まつてる——野村さん。もう行かないといけないんじゃないのかな」

そして、歌苗は、わたしの目の前から消えた。

「……ほんとにごめん。」

人通りの少ない廊下へと移動した後、瀬川君は私に謝った。伊勢先輩はもういない。この事態を收拾するため走って行ってしまった。わたしは首を振って、いまだこぼれる涙を拭いた。

「俺は純粹にお前の音楽が好きだったんだ。認めてた。尊敬、するぐらいだったよ。おまえが毎日管棟から一番遅くに帰ってるのとか、

よく見てたし。けどこの学校の教育に苦しんで小さくなってるのも見えた。だからドヴォルザークの舞台を利用してもっと大きくなつていいって伝えようとしたんだよ」

——尊敬。

「それがこんなことになるなんて思わなかった。顔がなんだ、見かけがなんだってんだよね？俺、大事な仲間傷つけるような外見なんて、欲しくもなんともねえよ」

——仲、間。

「……っ」

また涙があふれてきた。ほんとうにこの人は、すごすぎる。わたしなんかを目に止めていてくれて。そのわたしが小さく上げていた悲鳴を、ちゃんと聞いてくれていた。

「ごめんな。高崎」

「いいよ、もう、いい。」

「だけど俺はもう行かなきゃならない。そのことについても謝る。」

言われた言葉におもわず顔を上げた。瀬川君は、あの眼をしていて。誰よりも愛しい人、恩納さんを見つめるときの眼。

「眼を離せない……ひとがいるんだよ。」

「知ってたよ」

間髪いれずに答えたのは、もう胸がどうしようもなく破裂しそうに痛んでいたからだだった。

あのひとがいるから。

恩納さんがいるから。

瀬川君はそんな顔をする。

そんなに申し訳なさそうにあたしに謝る。

スーツの胸ポケットに入ってる、室内楽のパンフレット、その上に。

恩納さんの名前も印刷されてるって、あたしはちゃんと知ってた。

「頑張れ。室内楽。俺も聴きに行くから」

「……うん」

「ごめんな」

「……いいんだ。もう、いい。瀬川君がいたから、あたしは自分のオーボエにちよつとだけ自信が持てるようになった。それと引き換えになくなるものもある。あたりまえだよ」

「お前は、お前自身の力で前に進んだだけだよ」

瀬川君は笑った。

だから私も、そんなことない、と泣き笑いしていた。
そこであ、と気づく。

ふたりして、笑った顔を見るのははじめてだった。

「……はは。なんだ。笑うんじゃない、高崎も」

「……自分でも、忘れてたよ」

最近、色々あったからさ。
笑う余裕なんてどこにもなかった。

わたしは瀬川君の眼をのぞきこんだ。そして言った。

「ありがとう。もう大丈夫。行っているよ」

「……うん。高崎、」

「ごめんはもういらないよ。好きなひとにそんなに謝られてもうれしくない」

「え」

かち、と瀬川君が硬直するのがおかしかった。わたしは笑って、もう彼より先に行くことにした。

たたと2・3歩駆け出して、それから振り返る。

「でも、ちょっとだけだよ」

「ちょっと、だけ？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔の瀬川君に、こう告げて、それから本当に別れた。

「好きだったけど、ちょっとだけ！」

さあ。行かなくちゃ。

この子と一緒に。

吹かなくちゃ。私のオーボエを。

今日も明日もそれから先も、最高の演奏をするよ。

little

そして。

それから数年が過ぎ。

いくつもの季節と国と日々を越えて――

再びわたしたちは相見える。

『グッド、グッド』

すうつと細く息を吐き出して一曲を吹き終えた私の目に、おだやかに微笑むダニエルの顔が見えた。モーツアルトのオーボエ協奏曲昔から何回も弾いてきたけど、今回は特別。なんていってもプロと共演することになってるのだ。

『みちがえるようになったね。まゆ。これならバーミンガムの奴らも文句は言わないだろう。今日はもういいから、早く帰って休みなさい。ジョージに連絡を入れておくから、一緒に車にのせてもらって戻るといい』

『うん、わかった。ありがとう、ダニエル』

『こちらこそ。きみのような生徒を持てて僕は幸せだよ』

にこ、と微笑むその姿は、彼の息子さんにほんとそっくりだ。もつともジョージ君のほうがかなり東洋的でエキゾチックだけれども、どちらにしろ双方美男子。血は濃いものだ。

オーボエをしまいながら私は考えて、それからよしと部屋の扉に手をかけた。

『じゃあダニエル、またね！先に戻っています』

『うむ。気をつけるんだよ』

バーミンガム交響楽団との共演。いくつもの経験を乗り越えてたどりついたその舞台が明日にせまっている。緊張するけど、楽しみ。怖いけど、わくわくする。わたしはわけもなくハイになってアカデミーの廊下を小走りにかけぬけた。

あの後、あのドヴォルザークの音楽祭の後をはじめて会ってからというもの、ダニエル・ヒューバーさんの行動は早かった。わたしが三年生の学年を終了した時点で大学に休学届を出させ、そのまま同年の春にはわたしをイギリスに連れて行き、語学研修と共にありとあらゆる音楽の勉強を教授、そして王立音楽院の入学試験を受けさせた。

ロイヤル・アカデミー。世界的音楽家を何人も輩出しているそのイギリス随一の音楽院にわたしなんか受かるはずはない！と思っていたのに……なぜか、本当になぜか、受かってしまった。

わたしは今、心の底から楽しく音楽を学んでいる。

『まーゆ！帰るのかい、また明日ね！』

『あんまり走ると転ぶよー気をつけて』

『まゆ、ヒューバーがさつき捜してたぜ。エントランスの方降りてった』

すれ違う友人達は肌も眼も髪の色もさまざま。だけど誰一人として自分に劣等感を抱いていたりはない。自由。時としてそれは枷

になることもある言葉だけど。あらゆる意味を含めた自由がここにはある。

エントランスに続くらせん階段を降りていくと、中ほどの位置で手すりにもたれながらジョージ君が黒人の女の子と談笑していた。わたしが気づいて立ち止まると、『Sorry, my friend has come.』とかなんとか言ってさりとその子と別れ、こちらへと笑顔を向ける。

「待ってたよ、まゆ。父さんのレッスン終わった？」

「うん。ご機嫌だった」

「『彼』が今日うちに来るからだよ。来月ロイヤルフィルとエルガーやるだろう？イギリスに来るときは足がかりにしてもらってるんだ。会いたいしね」

「わたしもう2年？3年会ってないよ。楽しみだなあ」

「まあ彼はいつまでたっても彼のまんまだと思うけど。もう来てるよ。エントランス前に車とめてる」

ジョージ君は25歳。ついこの間学生という身分にもかかわらずプロのオーケストラへの入団を果たしてアカデミー中の話題をさらった。きれいな顔も紳士的な態度も相変わらず冴え渡っているけど、大人の引き締まりが随所に見られてきてますます魅力的な感じ。大学院課程はもう修了したはずなのだけど……あいかわらず学校にはいるんだよね。謎。

「じゃ、行こうか」

「うん」

微笑みあい、わたしたちは共にアカデミーを出た。
そしてそこには、「彼」が居た。

エントランス前、車道に寄せて止まっている一台の白い車。本来ならばヒューバーさんちの所有物であるそれに背を預けながら立っているのは、長身で目立つ東洋人。

わたしはうれしくなって、思わず叫んでいた。

「ロングタイムノー・シー！ミスター・セガワ！」

「お……っ、と、高崎！？」

思い切り驚いたようにわたしを見る瀬川君は、記憶の中にある彼よりずっと、柔和で穏やかな表情を浮かべる人になっていた。ジョージ君も含めて三人向かい合い、まじまじとお互いの成長を目の当たりにする。

「うわあ」

瀬川君は、かなり眼を見張っていた。

「高崎、すごいな。かつこよくなってる」

「またまた。誉めてもなんにもでないよ」

「いや、本心。なんていうか……見違えたよ」

「それ、ダニエルにも言われた」

言っと、ジョージ君が横でははと声を上げて笑った。父さんらしいやと。そしてそのまま瀬川君の顔を見て、何かからかうように問い掛けた。

「ところで、愛しの若奥様は？」

「身重なもんで。連れて来れないよ、さすがにね」

さらっと答えつつも、照れたような笑顔は隠し切れない。

瀬川君は、あのドヴォルザークを弾いたすぐ後大学を退学した。そして数カ月後に世界でいちばん歴史が古く難しいといわれている音楽コンクールであつさりと優勝を勝ち取り、その名を世界に轟かせる。コンクールの褒賞として与えられたデビューコンサートがものすごい絶賛を浴びて、今では押しも押されぬ一流音楽家としての地位を得た。

愛しの恩納さんとも去年あたりにかなりの若さで結婚したそうで。

幸せて幸せてしようのない生活を送っている……との話。

「さー、じゃ早く帰るぞ。ジョージ、おまえ運転する？」

「えー。僕疲れてるからやだ。カイやってよ」

「……」

「チエロあるし。よろしく」

「……王子だなお前。」

眉をしかめながらも瀬川君は了承し、それから私の顔を見た。ん？と首をかしげてみる私。そんな風に見つめられても、もう胸は痛まないよ。もう大丈夫。

わたしたちは今こうして、音楽家として、同じ道を歩む仲間として、再会することができたんだから。

「なに瀬川君ー」

「明日、だろ？バーミンガムとの共演」

「うん！めっちゃ楽しみ！」

「学校楽しい？」

「ちょー楽しい！ほんと楽しい！幸せだよ！」
「……よかった」

優しく微笑みかけられて、わたしも笑った。
車に乗り込んで、出発する。

開け放した窓から吹き込んでくる風は生暖かくて優しい。空は曇ったグレーだけれど、高い。

——そういえば、今日のレッスンでダニエルが。

ふと、思い出す。そうだ、ダニエルが別れ際に何か早口で呟いていた。空がどうか言ってなかったっけ。ううん？違うな、鳥、かな？

「なんだっけ……」

「どしたのまゆ？」

「あのねー、今日のレッスンでダニエルが、なんか言ってたんだけど。別れ際に。思い出せなくて。早口すぎたし」

「ああ、もしかしてあれじゃん？ジョージ」

後部座席でひとり呟いていたわたしにジョージ君、瀬川君と加わってくる。ハンドルを慣れた手つきで動かしながら瀬川君がBGMにビリー・ジョエルをかけていた。……渋い。

「いつもの。お気に入りの生徒が巣立つ直前に必ず言うヤツ」

「あー、あれ。僕とマリも言われたよ、オケ入団決まった時」

「なに？鳥だっけ、空だっけ」

「『飛び立ちなさい、どこまでも』。ジョージの親父さんらしいだろ。英語で言うと——」

— Fly high, little bird .

「ねーカイ。家帰ったら僕ヴィオラに持ち変えるからさ、まゆとマリ入れてオーボエカルテットやろうよ」

「いいね。バツハもいいな」

「ブラームスのシンフォニーも吹いて欲しいし」

「ついでにベートーヴェンの英雄も」

「……そんなに吹いたらわたし呼吸困難で死んじゃうよ!」

あはは、と笑いあいながら、わたしたちは皆、頭の中でダニエルの言葉を反芻していた。口に出して確かめ合ったわけではないけど、きっと皆が同じことを考えていたという確信が空気に満ちてた。

— Fly high ,

あの空の上まで。人として生まれたこと、人間が生み出した音楽を奏でられるという誇りと喜びを抱いて。

— little bird .

この小さな羽で、小さな体で、小さな前進を繰り返そう。

そしていつか星になろう。

音楽があるから、共に生きる仲間がいるから、
いつまでだって私たちは頑張りつづけることができる。

……どこまでも、どこまでも。

飛んでゆこう。

はるかな高みへ。

(F i n)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2953q/>

little

2011年1月25日01時25分発行